《資料比較》

〈ハムレット〉の系譜――太宰治『新ハムレット』と四つの作品――

長原しのぶ　NAGAHARA , Shinobu

太宰治『新ハムレット』（一九四七年七月　文藝春秋社刊行）には四つの作品が影響している。その二つは、太宰自身が「はしがき」（「太宰治氏（新ハムレット―書下ろし長編小説）」「文藝春秋」一九四一年六月）の中で「此の作品を書くに当り、坪内博士訳の「ハムレット」と、それから、浦口文治氏著の「新評註ハムレット」だけを、一とほり読んでみた」と述べていることから執筆素材として明らかな浦口「ハムレット」と坪内「ハムレット」である。

さらにもう一つとして、佐々木基一が「昭和十六年の文学を語る（座談会）」（高木卓・大井広介・坂口安吾・井上友一郎・平野謙・宮内寒弥「昭和十六年の文学を語る（座談会）」（「現代文学」第四巻第一〇号、一九四一年一一月）において「志賀直哉の「クローディアスの日記」を思ひ出しましたよ」と指摘したように志賀直哉の「クローディアスの日記」（「白樺」一九一二年九月）が挙げられる。

そして最後の一つは、小林秀雄の「おふえりや遺文」（「改造」一九三二年一一月）である。「おふえりや遺文」と『新ハムレット』の関連性についてはこれまで重要視されておらず、唯一、渥美孝子氏（「『おふえりや遺文』と『新ハムレット』―メタ言語小説の観点から―」「東北学院大学論集　人間・言語・情報」一九九二年九月）が『新ハムレット』に描かれる「無邪気」なオフヰリヤ像には「おふえりや遺文」が反映されているとして、小林から太宰への積極的な繋がりに言及している。その上で氏は、「小林が極力排除しようとした「交通の欲望」から生まれる言葉に、言葉の実質を見た」のが太宰だと捉え、両作品に表出する「言葉」の重要性を指摘する。

以上のとおり、『新ハムレット』は、浦口「ハムレット」、坪内「ハムレット」、「クローディアスの日記」、「おふえりや遺文」の四作品と密接な関係を持ち、それぞれと比較することによってはじめて『新ハムレット』の独自性が見えてくると考えられる。これまでも、四作品との具体的な比較検証によって『新ハムレット』の解釈は広がってきた。浦口「ハムレット」との比較から『新ハムレット』の独自性を見出す論考としては、平岡敏夫「「新ハムレット」論」（『作品論太宰治』一九七四年六月　双文社出版）、山崎正純「「新ハムレット」論―表現の虚妄を見据える眼―」（「近代文学論集12」一九八六年一一月）、千葉宣一「『新ハムレット』試論」（「解釈と鑑賞」一九八七年六月　至文堂）、鶴谷憲三「「新ハムレット」論序説―浦口文治への関わりを中心に―」（「日本文学研究」第二六号、一九九〇年一一月）などが確認できる。例えば、平岡氏は、浦口「ハムレット」との比較から「浦口的な絶対化をたえず避けて相対化しつつ、さらに深いところで共感を寄せ」た太宰流のハムレット像を導き出す。一方で、山崎氏はハムレット以外の人物達に注目している。その一つがクローヂヤス像である。氏は太宰のクローヂヤスと浦口のクローヂヤスの共通性に着目し、「太宰の〈過去の生活感情〉を仮託された新しいクローヂヤス像が浦口の言葉を足がかりとしながら創出」されたとする。

また、坪内「ハムレット」との比較から考察がなされたものとしては、浦田義和「悲劇という事―太宰治「新ハムレット」ノート―」（「昭和文学研究」第七集、一九八三年七月）、越川正三「太宰治対志賀直哉―悲劇『ハムレット』」（「関西文学」一九八九年三月）、槌賀七代「太宰治『新ハムレット』論」（「日本文藝研究」第四一巻第三・四号、一九九〇年一月）、鶴谷憲三「「新ハムレット」の世界」（「日本文学研究」第二八号、一九九四年一一月）などがある。その中でもとくに詳細な比較検証をおこなっ

ているのが槌賀氏である。氏は、両作品の際立った相違を八点挙げ、登場人物の「饒舌」さを打ち出し、『新ハムレット』を「饒舌に満ちている作品」と捉える。そして、この「饒舌」が登場人物達の「思いこみ」と「すれちが」いという『新ハムレット』の悲劇を演出すると解釈する。

次に、志賀直哉から太宰治への影響に関しては、平岡敏夫「「新ハムレット」論」（『作品論太宰治』一九七四年六月　双文社出版）、磯貝英夫「新ハムレット」論（『一冊の講座太宰治』一九八三年三月　有精堂出版）、越川正三「太宰治対志賀直哉―悲劇『ハムレット』」（「関西文学」一九八九年三月）、鶴谷憲三「「新ハムレット」の世界」（「日本文学研究」第二八号、一九九四年一一月）、佐藤泰正『新ハムレット』小論―「クローディアスの日記」と対比しつつ」（『佐藤泰正著作集⑤太宰治論』一九九七年二月）などに指摘がある。磯貝氏は「志賀における、クローディアスのハムレット批判を、すべて生かしつつ、さらに、それをうわまわって、疑念・批判を、ハムレット側からクローディアスにつきつけること―太宰の「新ハムレット」は、そんなふうにして構想された」とし、『新ハムレット』を「「クローディアスの日記」の変奏」と見なしているが、「クローディアスの日記」からの様々の影響を確認したうえで、太宰が志賀をいかに凌駕し、新たなる独自の〈悲劇〉の世界を構築したのかを探るには他三作品も含め、より厳密な比較が必要となるだろう。

以上の論考はいずれも示唆に富むものであり、『新ハムレット』のさまざまな問題点を浮き彫りにするものである。これらの先行研究を踏まえた上で、拙論「〈ハムレット〉の系譜―太宰治『新ハムレット』考」（斎藤理生／松本和也編『新世紀太宰治』二〇〇九年六月　双文社出版）において『新ハムレット』の新たな解釈を目指した。その一つの作業として、これまでは個々に検証されていた『新ハムレット』と先に挙げたそれぞれの作品をまとめて比較し、その共通性と相違点を明確にすることを試みた。その結果、これまで注目されていなかった『新ハムレット』の独自性として聖書、キリスト教との関連を導き出し、太宰独自の〈悲劇〉の物語としての『新ハムレット』を導き出した。

今回、本雑誌において、その時に作成した比較対照表を発表する機会をえた。次に、その凡例を示すとともに、表①（〈素材との比較〉―坪内「ハムレット」と浦口「ハムレット」の影響―）、表②（〈ハムレット〉の系譜―志賀直哉・小林秀雄から太宰治へ）として、『新ハムレット』と四つの作品の関わりをまとめる。

凡例

1、『新ハムレット』は『太宰治全集5』（一九九八年八月　筑摩書房）によった。
2、浦口「ハムレット」は浦口文治『新評註ハムレット』（一九三二年一〇月　三省堂）からの引用である。
3、坪内「ハムレット」は坪内逍遥訳『新修シエークスピヤ全集』第二七巻（一九三三年九月　中央公論社）からの引用である。
4、「クローディアスの日記」は『志賀直哉全集第二巻』一九五二年六月　岩波書店）によった。
5、「おふえりや遺文」は『小林秀雄全集第二巻Ｘへの手紙』二〇〇一年五月　新潮社）によった。
6、共通性を見出した箇所には傍線を付した。
7、相違点と見なした箇所には点線を付した。
8、表①の最後に〈考察〉として拙論に関わる注目ポイントをまとめて記した。

最後にあらためて、資料の発表を勧めてくださった松本和也氏、並びに掲載の機会を与えてくださった本雑誌編集部の皆さまに深く感謝する。

表①〈素材との比較〉―坪内「ハムレット」と浦口「ハムレット」の影響―

	1	2
「新ハムレット」	先王が、まことに突然、亡くなつて、その涙も乾かぬうちに、わしのやうな者が位を継ぎ、また此の度はガーツルードと新婚の式を行ひ、わしとしても具合の悪ひ事でしたが、すべて此のデンマークの為です。みなとも充分に相談の上で、いろいろ取りきめた事ですから、地下の兄、先王も、皆の私心無き憂国の情にめんじて、わしたちを許して呉れるだらうと思ふ。（王）―「一」 王子のハムレットは若冠ゆゑ、皆のすすめに依つて、わしが王位にのぼつたのですが、わしとても先王ほどの手腕は無し、徳望も無ければ、また、ごらんのとほり風采もあがらず、血をわけた実の兄弟とも思はれぬくらゐに不敏の弟なのですから、果して此の重責に堪へ得るかどうか、（王）―「一」	まことに此の頃のデンマークは、ノーウエーとも不仲であり、いつ戦争が起るかも知れず、王位は、一日も空けて置く事が出来なかつたのです。王子はムレットは弱輩ゆへ、皆のすすめに依つて、わしが王位にのぼつたのですが、わしとても先王ほどの手腕は無し、徳望も無ければ、また、ごらんのとほり風采もあがらず、血をわけた実の兄弟とも思はれぬくらゐに不敏の弟のですから、果して此の重責に堪へ得るかどうか、外国の侮りを受けずにすみかどうか頗る不安に思つて居りましたところ、かねて令徳の誉高ひガーツルードどのが、一生わしの傍にいて、国の為、わしの力になつて呉れる事になりましたところ、かねて令徳の誉高ひガーツルードどのが、一生わしの傍にいて、国の為、わしの
坪内「ハムレット」	親兄故ハムレット王崩御の記憶今も尚鮮たなれば、おのおの深き悲歎に沈み全国挙つて一つ眉根に潜まんが相応しき振舞なれども、哀んで傷らんは愚かなれば、吾等分別を以て至情と闘ひ、深く故王を哀みながらも国主たる身の本分を忘れず。すなはち堪へがたき悲歎を忍んで、悲喜哀感を等分に、一眼には涙を垂れ、一眼には笑を含み、祝うて故王の葬儀を了へ、泣いて新婚の式を行ひ、前の嫂たるガーツルードを此度改めて妃となし、此デンマークの主権を分てり。また予め此義については、広く聡明の御身等に詢り、十二分の談合を経たりし條、深く満足に思ふぞよ。（王）―「第一幕第二場」	若輩者のフォーチンブラス、予をば庸主と侮つてか、但しは親兄の崩御によつて、国内乱れたりと憶測つてか、夢のやうなる優越をば恃みとなし、煩しく使者を送り、先年其父フォーチンブラスが、契約の明文によつて、我勇敢なる兄君に献げ奉りし旧領地を取戻さんず結構。彼れが事はこれまで。 さて今日一同をかく集へつる仔細は、右フォーチンブラスが叔父ノーウェー王こと、近年、老病にて臥床を離るること叶はざれば、かかる陰謀あるを知らず、されども此度の徴募に従ひまた其賦役に応ずる輩は何れも彼れが配下の者ゆゑ、之を制へ止めんことは彼れが力に能はん筈。（略）コーニリヤス、ヴルチマンドの両卿には、この挨拶の使者となつて、老ノーウェーが許に下向あるべし。（王）―「第一幕第二場」
浦口「ハムレット」	remembrabce of ourselves, 茲に仄かされてゐるのは彼が自覚してゐると稱する此国家の支配者としての責任心と自重心とである。（King―Act.1Scene2）	the imperial jointress 彼女自身は元来皇族で、先王歿後もなほ女王であつた。従つて軍国多事の際、彼女は依然として責任分擔の当局者であつた。彼女はまだその国政上の責任を解除されて、ただ財産所有権のみを保有した未亡人ではなかつた。（King―Act. 1Scene2）

	傍にいて、国の為、わしの力になつて呉れる事になりましたので、もはや王城の基礎も確固たり、デンマークも安泰と思ひます。（王）―「一」		
3	いかにも未熟の者ですから、皆も、今日以後、変らず忠勤の程を見せ、わしを安心させて下さい。（王）―「一」	さらばぢや、すみやかに命を果して忠勤の程を見せてくりゃれ。（王）―「第二場」	
4	ああ、忘れていた。レヤチーズが、わしに何か願ひがあるとか言つていましたね。（王）―「一」実は、フランスへ、もう一度遊学に行かせていただきたいと思つてゐるのでございますが。（レヤ）―「一」 君の父にも相談した上の事でせうね。ポローニヤス、どうですか？ へつへ、だうも若ひものには、フランスの味が忘れかねるやうでございます。（ポロ）―「一」 レヤチーズ、子供にとつては、王の裁可よりも、父の許しのほうが大事です。一家の和合はそのまま王の忠義です。（王）―「一」	さてレヤーチーズよ、そちの申條は如何な事ぢゃ？道理に合うた請願ならばデンマーク王が聴かうでならうか？ （略）御身が父御とデンマーク王座との交情は、心と頭、手と口とよりも懇親ぢやわい。レヤーチーズよ、おぬしの望とは何ぢゃ？（王）―「第二場」 公務も果てましたる上は、改めてフランス国へ立戻りたき微臣が衷情、何卒御仁察下しおかれませう。 （レヤ）―「第一幕第二場」 して父御には異存無いか？ポローニヤス、御身の意は？（王）―「第二場」	
5	ハムレットは、このごろ元気が無いようですが、君も君もフランスへ行きたいのですか？（王）―「一」	はて、心地でもあしいか、いつも曇りがちな其面色？（王）―「第二場」	
6	僕ですか？からかわないで下さい。僕は地獄へ行くんです。（ハム）―「一」	いいや、曇りどころか、いつぞ日あたりが好過ぎまする。（ハム）―「第一幕第二場」	
7	君は、ウイツタンバーグの大学へ、また行きたいと云つていましたね。でもそれは怠へて下さい。わしからお願ひします。（略）君が、いなくなると、王妃だつて淋しがるでせう。（王）―「一」	さて彼のウイツタンバーグの大学へ再び赴かんの思立は、予の好まぬ所願はくは、近親とも、重臣とも、我等が目を慰むべく留りめされ。（王）―「第一幕第二場」 なう、ハムレットよ、此母の祈をば徒らになお為やっそ。ここにいやれ。ウイッタンバーグへは往かしますな。 （妃）―「第一幕第二場」	
8	ハムレット、なんといふ事を、おつしやるのです。私には、あなたが、ふてくされてゐるやうにしか思はれません。そんな厭	ハムレットよ、その愁はしげな目の色をふりすててなつかしらしうわが君を仰ぎめされ。いつまでも目を伏せて冥府の父君をのみ慕ひたまふな（妃）―	新王が今や傾けつつあるのは皇太子 Hamlet の Wittenberg 大学への帰校中止に対する祝杯である。 (Ham―Act.1.Scene4)

味な、気障な態度は、およしなさい。不満があるなら男らしく、はつきりおつしやつて下さい。（王妃）—「一」			
9	若い者には、若い者の正当な言ひ分がある筈です。わしにも、反省しなければならぬ事が、まだまだ、あるやうに思はれます。（王）—「一」		Hamlet の青年的性格は従来幾多の批評家が曲解した処と全然別である。（Mar—Act.1.Scene1)
10	ガーツルード、言葉をつつしみなさい。ハムレツトはあなたひとりの子ではありません。ハムレツトは、デンマーク国の王子です。（王）—「一」 すべて、此のデンマークの為に、父祖の土の為に、父祖の土の為に、自分の感情は捨てなければなりません。此のデンマークの土も、海も、民も、やがては君の掌に渡されるのです。わしたちは、いま協力しなければいけません。わしを愛して呉れとは申しません。わしだつて君を、心の底から我が子と呼んで抱きしめる程の愛情は、打ち明けたところ、だうしても感ぜられない状態なのですから、君だけ、無理に愛せよ等とは言へません。（王）—「一」	すなはち、国民に、御身は既に王位を継ぐべく、また予が恩愛は真の父に異ならずと知しめ給へ。（王）—「第一幕第二場」	新王の魂胆は Hamlet を庇護して彼をとりこにするのではなくて、彼を持ち上げて篭絡してしまはうといふのである（King—Act.1.Scene2)
11	ハムレツトだつて、もう二十三になります。（王妃）—「一」		his youth　Hamlet が当時まだ二十才か二十一才であつたといふ一つの証拠。（King—Act.2.Scene2) 此劇を通じて見るに、H amle t は二十五才以上であつたとは迚も思はれない、寧ろ二十一才位であつたらしい。（First Clo—Act.5.Scene1)
12	いつまで、甘へているのでせう。私は生みの母として此の子を恥ずかしく思ひます。（王妃）—「一」 王妃には、生みの母といふ安心があつて、その愛情を頼みすぎて、そんな事を云ふのでせうが、若い者にとつては、陰の愛情よりも、あらはされた言葉のほうが重大なのです。（王）—「一」		no other but 流石に女王には実母としてのこの気懸りがある。（Quee—Act.2.Scene2) 此行以下 75 行迄 Queen の Speech 全体を通じて Hamle t に対する代名詞は thy,thine,thee である。孰れも母親としての愛情の表はれで、唯の一度も you が使はれてゐない（Queen—Act.1.Scene2)

13	私には、この子の考へてゐる事くらゐ、なんでもわかります。この喪服だつて、私たちへのいやがらせです。先王の死を、もはや忘れたのかといふ、当てつけのつもりなのでせう。（王妃）—「一」 ハムレットが喪服を着ていつて、少しも差しつかへ無いと思ひます。少年の感傷は純粋なものです。（王）—「一」	後れたるが子が喪に篭つて、暫く哀悼の体を尽すは、まことに然あるべき情義なれども、さりとて頑なる哀傷は、神を信ぜざる振舞、二つには男らしからぬ愁嘆、すなはち天に対しては非礼、心に信仰の守護無き証、短慮無知愚昧の証拠。何故と言やれ、かくあるは必然にして世の常事ぞと悟つたる以上、などいつまでも思ひ入りて、さしも気むづかしう嘆き悲む？あさましあさまし！（王）—「第一幕第二場」	thy nighted colour は直接には Hamlet の黒喪服、間接には彼の憂ひ顔をさしての形容である。(Queen—Act.1. Scene2)
14	ハムレット、大きくなつたね。もう、わしと背丈が同じくらゐだ。これからも、どんどん大人になるでせう。（略）わしも、思つてゐるところを虚心坦懐に申ますから、君も、遠慮なさらず率直に、なんでも言つて下さい。どんなに愛し合つていても、口に出して言はなければ、その愛が互ひにわからないでいる事だつて、世の中には、ままあるのです。（王）—「二」		this dream of his advantage 前三行の誤算より来る自分の勝味といふこの夢。新王が相手方を小僧扱ひにする知力の鋭さと膽力のすわつた処を見よ。(King—Act.1.Scene2)
15	先王が亡くなられてから今日まで、もう二箇月になりますが、わしには何もかも夢のやうです。（王）—「一」 わしも此の二箇月間は、いそがしく、君と落ちつゐて話をする機会もなかつた。全く、そのひまは無かつたのです。ゆるして下さい。（王）—「一」		The plays the thing この劇第一幕の幕落ちと第二幕の幕あきとの間には約二ヶ月の間隔がある。(Ham—Act.2.Sce ne2) twice two months 此劇の組組立によれば、彼の父の急死より第一幕の開幕迄に二ヶ月足らずの間隔（参照Ⅰ、Ⅱ、138）があつて、新王と女王との結婚は旧王の死より一ヶ月以内の事（参照Ⅰ、Ⅱ、145）であつた。そして第一幕の出来事は二日間の事で、第一幕と第二幕との間隔はⅡ、Ⅲ、5 80 の註に述べてあるやうに、二ヶ月以上である。故に合計四ヶ月。(Oph—Act,3,Scene2)
16	A little more than kin, and less than kind.（ハム）—「一」 何だつて？よく聞きとれなかつた。ふざけては、いけません。わしは、まじめに尋ねているのです。語呂合はせのやうな、しゃれた答へかたはしないで下さい。		Ham.[Aside]A little more than kin,and less than kind. 此言葉の語源は kin で、これは kinned の約されたものらしい。従つてその発音も Elizabeth 朝に於ては、kinnd で、其意味も亦 kind=accordin

人生は、芝居ではないのです。（王）―「一」				g to ki=nayurally affectionate である。但しそれが親切なと訳されると、基本義が尚更に曖昧、また浅薄になつてしまふ。（略）しかし the King もさるもの、このAside を聞かぬ振りして平気を装ひつつ、猫撫で声で。（Ham― Act.1.Scene2）
	17 わかりました。それくらゐの事は、僕にだつて、わかつています。僕は、めんどうくさいんです。僕を、う少し遊ばせて置いて下さい。（ハム）―「一」			以上二行はこの劇に於ける Rhyme Tag である。それに対する私の試訳は、時勢の関節があづれてゐる…えい、うるさい、面倒だ…元来僕が生まれて来たのはその嵌め直しのためだ！である。またここ第一幕の幕落ち際は成人 Hamlet の誕生期として至極重要である。（Ham―Act,1,Sce ne5）
	18 よし、よし、わかつています。昔の学友たちと逢ひたくなつたのでせう。（略）ホレーショーを、わしが呼んで置きました。（王）―「一」 ホレーショーを呼んで呉れたとは、山羊のおじさん大出来だ。（ハム）―「一」 私が、王にお願ひして、あなたをウイツタンバーグからお呼びするやうに致しました。（王妃）―「四」	したが、此エルシノーアへお来やつた用事は何ぢや？ようせぬと、逗留中に暴酒を飲むことを教へられようぞ。（ハム）―「第一幕第二場」 実は、御父君の御葬儀を排し奉らうとて参りました。（ホレ）―「第一幕第二場」		
	19 もとをただせば、山羊のおじさんさ。お酒を飲んで酔つぱらつて、しよつちゆうお父さんに叱られてばかりいたぢやないか。僕をそそのかして、お城の外の女のところへ遊びに連れていつたのも、おの山羊のおじさんぢやないか。（ハム）―「一」			feast together 大酒癖は当時丁抹人一般の悪習で、同時に新王自身の弱点であつた。（King―Act,2,Scene2）
20 父は死に、母は奪はれ、おまけにあの山羊のおばけが、いやにもつたいぶつて僕にお説教ばかりする。いやらしい。きたならしい。ああ、でも、それよりも、僕には、もつと苦しい焼ける思ひのものがあるのだ。いや、何もかもだ。皆苦しい。いろんな	おお、此硬き剛き肉が、何とて融解けて露ともならぬぞ！せめて自殺を大罪とする神の掟がなくばなぁ！おお！おお！現世一切の業務が悉く厭はしうも、あさましうも、あぢきなうも、無益しうも思はるるわい！ちッ、あさましき！（略）御逝去の後二月！：いや、まだ二月にもなるま			

事が此の二箇月間、ごちやまぜになつて僕を襲つた。くるしい事が、こんなに一緒に次から次と起るものだとは知らなかつた。苦しみが苦しみを生み、悲しみが悲しみを生み、溜息が溜息をふやす。自殺。のがれる法は、それだけだ。（ハム）—「二」

荷作りくらゐは、おまへがしてくれたつていいぢやないか。ああ、いそがしい。（略）あんまり居眠りばかりしないで、たまにはフランスの兄さん、音信をしろよ。（レヤ）—「二」

すまいとし思うて？（オフ）—「二」

なんだい、そりやあ。へんな言葉だ。いやになるね。（レヤ）—「二」

だつて、坪内さまが、—（オフ）—「二」

ああ、そうか。坪内さんも、東洋一の大学者だが、少し言葉に懲り過ぎる。すまひとばし思ふて？とは、ひどいなあ。媚びてるよ。いやいや、坪内さんのせいだけぢやない。お前自身が、このごろ少しいやらしくなつてゐるのだ。気をつけなさい。兄さんには、なんでもわかる。（レヤ）—「二」

のぼせあがつているんだから仕様が無い。僕は、なるべくならば、こんな、くだらない事には口を出したくなかつたんだ。けがらはしい。（略）あの人がどんなお身分のお方か、それを考へたら、わかる事だ。出来ない相談だよ。（略）お前は、てて無し子を抱へて乞食にでもなるさ。いいか、あの人に、かう云つてくれ、レヤチーズの妹をなぐさみものにしたならば、どいつこいつの容赦は無い。どのやうなお身分の方であつても生かして置けぬと、レヤチーズが鬼神に誓つて言つてました、とさう伝へてくれ。（い。あのやうな比類稀なる国王！それと彼を比ぶれば日の神と羊の怪物。母上の面を荒い風にさへもあてまいと愛しがりなされた父上。情けない！あさましい！それを思ひ出さねばならぬか？（ハム）—「第一幕第二場」

父を殺され、母を辱められ、理に於ても、情に於ても忍ぶべからざるを忍んでをるとは！（ハム）—「第四幕第四場」

必要な品々も積込んでしまうたればさらばぢや。いもうとよ、出船、順風の便宜のあるたび、居眠つてをらいで消息を為やれよ。（レヤ）—「第一幕第三場」

すまいとばし思うて？（オフ）—「第一幕第三場」

ハムレットさまの、あの空めいたおいとしがりはな、結局一時の浮気心、若い気分のざれ事、いはば春宵ちの菫の花ぢや、早咲ぢや程に萎るるも早い。美しうはあれども当時の詠ぢや。香も慰みも徒の束の間、只それほどと思ふがよいぞよ。（レヤ）—「第一幕第三場」

御自身のお意さへ我物にして我物ならず、万事お気儘にもなされにくい、大切な御身分柄ぢや。（略）軽々しう彼の君の甘い言葉に耳を傾け、情の限を打込み、放埒な仰せのまま二つない操の寶を汚す時、取返しのならぬ一期の辱。（レヤ）—「第一幕第三場」

レヤ）―「二」

僕の反対するのは、何もあの人のお身分のせいばかりではないのだ。僕は、あの人がきらいのなのだ。大きらいなのだ。あの人は、ニヒリストだ。道楽者だ。（略）僕には、あんな性格の人は、いやだ。他人の心の裏を覗くのが素早くて、自分ひとり心得顔してにやにやしている。いやな人だよ。僕たちの懸命の努力を笑つているのだ。あんなのを軽薄才子といふのだ。いやに様子ふぶつと大勢の臣下の前もはばからず、めそめそ泣き出す。女の腐つたみたいな奴だ。（レヤ）―「二」

お言葉に逆ふやうですが、ハムレットさまは、いや王子さまは、決して、そのやうに劣つたお方ではございません。僕の尊敬している唯一のお方です。（略）ハムレットさまは、とても頭がいいから、僕の云はんとしている事は、云はないさきから御承知になつています。やりきれないくらゐです。（ホレ）―「四」

ハムレットさまの御気質は高潔です。明快であります。山中の湖水のやうに澄んで居ります。（ホレ）―「四」

僕は、御推量のとほり、だらしのない、弱虫の、道楽者です。何一つ、あなた達のお手伝ひが出来ません。けれども、僕だつて、デンマーク国の為には、いつでも命を捨てるつもりなのだ。（ハム）―「五」

お性格だつて、決して御立派ではございません。めめしいとでも申しませうか、ひとの陰口ばかりを気にして、いつも、いらいらなさつて居ります。いつかの夜など、信じられるのはお前だけだ、僕は人にだまされ利用されてばかりいる、僕は可哀想な子なのだからお前だけでも僕を捨てないでおくれと聞いていて浅間しくなるほど気弱ひ事を

unmanly は Hamlet 説破題一段の突撃力集注点。此王の鋭さを見よ。同時にその反射として Hamlet 性格の一大特徴があらはれて来る。彼が平素男らしさを以て世間に認められて居り、また男らしさを以て自負自任してゐた事がそれである。（King ― Act.1.Scene2）

Hamlet には使命観があつた一方に於ては国家政治の正義化、他方に於ては夫婦愛の純潔化、これが彼の復讐心の動力たる cause 即ち使命観であつた。（Ham―Act.2.Scene2）

沙翁が描いた処によれば、Hamlet がメランコリア型の人物ではなく、寧ろ一層健全なもつと勢力旺盛な青年であつた。（Ham ― Act.2.Scene2）

Finding ourselves 以下簡潔な筆致中に躍動してゐるのが Hamlet の活動振り。性来 over-meditative で、accidents に壓されてゆくものであると彼を見たのは Coleridge 一流の色眼鏡である。原作者の描いた儘の Hamlet は臨機応変、伸縮自在、動く活動力を兼ね備へた青年である。（Hor―Act.4.Scene6）

おつしやつて、両手で顔を覆ひ、泣く真似をなさいました。だうして、あんな、気障なお芝居をなさるのでせう。（略）ご自分を、むりやり悲劇の主人公にしなさらなければ、気がすまないらしいご様子でありました。（オフ）―「六」

24

兄さん、まだお疑ひになるの？（オフ）―「二」

そのお教訓を、妄の心の見張役にして、きつと其通りに守りませう。したが兄上きつと其通りに守りませう。したが兄上不品行な牧師たちは、他人には天へ往けというで、険阻な荊棘路を教へておき、自身は放埒な人たち同様、おのが訓へを守りもせず、あだ美しい花の咲く自堕落な道を通るとやら。そのやうなことをなされますなや。（オフ）―「第一幕第三場」

25

なんだ、まだこんなところにいたのか。（ポロ）―「二」

まだここにゐるのか、レヤーチーズ？（ポロ）―「第一幕第三場」

26

いいか、まず第一に、学校の成績を気にかけるな。学友が五十人あつたら、その中で四十番くらいの成績が最もよろしい。間違つても、一番にならうなどと思ふな。ポローニヤスの子供なら、そんなに頭のいい筈がない。自分の力の限度を知り、あきらめて、謙虚に学ぶ事。れが第一。つぎには、落第せぬ事。カンニングしても、かまはないから、落第だけは、せぬ事。落第は、一生お前の傷になります。（略）これもまた重大です。一学年上の学生を、必ずひとり、友人として置くかなければらぬ。試験の要領を聞くためだ。試験管の採点の癖を教へてもらへる。さらに、もうひとり、同学年の秀才と必ず親交を結ばなければならぬ。ノオトを貸してもらひ、また試験の時には、お前の座席のすぐ隣りに坐つてもらふためであるます。学友は、その二人だけで充分です。不要の交友は、不要の出費。さて、次は、金銭に就いて。これはとりわけ注意を必要とする。金銭の貸借、一切、まかりならん。借りる事は、も考慮をうかと舌出すな、機に合はぬ考慮は行ふな。友とは親しめ、さりながらかまへて押れるな。試験済の友達は逃がさぬやうに鐵箍をはめておけ（略）財布が許すならば身廻りには金目を吝むな、異様の好みはすな。立派は可し、華美はわるし。衣装は数々人を表す、別けてフランスの上流の此道の大通生粋。借手にもなるな、貸手にもなるな。（略）最後に、最も大切なる訓：：己れに対して忠実なれ、さすれば夜の昼に継ぐが如く他人に対しても忠実ならん。（ポロ）―「第一幕第三場」

do not dull thy palm は S.Johnson の所説の通り人毎に握手を与へて、自分の掌を鈍感にするなといふ意味。(Pol—Act.1. Scene3)

	27	28	29
とより不埒、貸す事もならん。餓死するとも借金はするな。（略）帰る時には、たしかな学友を選んでその者に、充分の会費を手渡す事を忘れるな。三両の会費であつたら、五両。五両の会費であつたら十両、置いてさつと引き上げるのが、いい男です。（ポロ）—「二」	二十三にもなつて、あれくらいの事を心得ていないで、だうする。同じ年齢でも、ハムレツトさまなどに較べると三倍も大人だ。レヤチーズは此の親爺よりも偉くなる子です。でも、あんなにやかましく、こまごま云つてやるのは、わしの、深く考へた上での計略なんだ。（ポロ）—「二」	レヤチーズには、レヤチーズの生活流儀があるでせう。時代も、かはつているでせう。レヤチーズは自由にやつて行つていいのです。ただ一つ、わしが心配して気をもんでいるのだといふ事だけを、知つてもらへたらいいのです。（ポロ）—「二」	わしは、けさ或る下役から、いやな忠告を受けた寝耳に水の忠告であつたが、お前のこのごろのおちこんでいる様子と思ひ合せて、もしや、と思つた。（ポロ）—「二」
		おぬしも、最前から言うた通りにして、倅の内情をば探りやれ。合点が往たか、どうぢや？（ポロ）—「第二幕第一場」好きな音色をば出させたがよいぞ。（ポロ）—「第二幕第一場」	聞けば此中から王子がたびたびお内蜜にてそなたの許へ入られげな、すると其方が何の斟酌もなう甚う御入魂にしやるげな：若しも定ならば、気つと言うておかねばならぬ、其方は俺の女であり、またまだ嫁入りせぬ身でもあるといふことを好う合点してゐやらぬや
	Laertes は Hamlet と同様に高等教育を受けて、立派に出来上つた一個の紳士である。此劇の登場人物として彼の役目はかなりに重要である。といふのは H amlet に対する foil（箔）役である。性来活動的な青年として、彼によく嵌つてゐるのはこの対比的の引立て役である。彼の性格を解釈すべき鍵が茲にある。（Act.1.Scene3） Ply his music 当時青年の教養上最も普通な科目の一つで、同時に彼等が最も嫌ひ易かつたのは music である。従つて活動性の Laertes、もまたそれを厭うたが、Polonius はそれを勉強させて置く事が彼彼の将来の地位上肝心であると考へた。この一言を最後に加へたのはこの老人の周到な思慮の発露である。（Pol—Act.2.Scene1）		茲にも亦 Elizabeth 朝の乙女振りが描かれてゐる。（Oph—Act.1.Scene3）

	30	31	32	33
	オフイリヤ、お前たちの恋愛は卑怯だね。少しも無邪気なところが無い。濁つてゐる。なぜ、わしたちにそんに隠さねばならなかつたのか。相手のお方の態度も見上げたものさ。てんとして喪服なぞをお召しになつて、ご自身の不義は棚にあげ、かへつて王や王妃に、いや味をおつしやる。いまの若い者の恋愛とは、そんなものかねえ。（略）クローヂヤスさまだつて、もののわからぬおかたではない。（略）お前は、クイーンの冠を取りそこねた。（ポロ）—「二」	寒いですねえ、こちらは。（略）こちらは、毎晩こんなに寒いのですか？（ホレ）—「三」 いや、今夜はこれでも暖いはうだよ。一時は、寒かつたがねえ。これからは暖かくなる一方だ。もう、デンマークも、やがて春さ。（ハム）—「三」	それどころぢやないんだ。嘆きがめらめら燃え出したよ。（ハム）—「三」	そんなにホレーショーの誠実を侮辱なさるんだつたら申し上げます。本当に、平気でお聞き流し願ひます。つまらない、とるにも足らぬ噂です。（ホレ）
	うぢゃぞよ。（ポロ）—「第一幕第三場」	身を切るやうな風ぢゃ。いかう寒いの。（ハム）—「第一幕第四場」	彼の物は、今宵もまた出ましたかな？（マー）—「第一幕第一場」 先の王ハムレットの亡霊現れる。「第一幕第一場」 救世主の御降誕をお祝ひ申す季節と	
	さて、ハムレットさまの御意はぢゃ、何がさて、まだお年は若し、婦女とはちがうて、万事伸縮が御自由な御身分ぢゃと思や所詮は御誓言を真に受けやるなやぢゃ。誓言といふものは、人を欺さう為ばかりに奇特らしう経文をさへも口ずさむ女衒を宛然のもの、肚と衣とは雲泥の不貞節を勧める仲人ぢゃ。（略）以後は暫時たりともハムレットさまと言葉を交し乃至お物語仕ること罷りならぬ。（ポロ）—「第一幕第三場」 一時の戯にそもじを疵物にさつしやらうかとばかり思ひ込んだのは、おのれやれ、邪推であつたか！とかく老人の過慮と若い者の無分別。：：：さアさア王の御許へ参らう。こりゃ直に聞上げねばならぬわ。恋の顛末を申したならば、お憎みを受けうも知れぬが、隠しておいたなら、尚一段のお哀しみともならう。（ポロ）—「第二幕第二場」			
	The better to beguile 世間知ずの女子供をだまして陥れると方便といふ意味。 (Pol—Act.1.Scene2) this (letter) Hamlet の第一恋文であらうか、少なくとも彼の手紙を突返せといふ其父の言付以前に、彼女が受取つた手紙の一つである。(Pol—Act.2.Scene2)		dear は愛と憎しみ喜びと悲しみ何れにせよ、人の一身的利害休戚に直接影響のある事柄一切に使はれた形容詞である。（略）悪魔と天上で相合するのは人間にとつてはあるまじき事の最上である。しかし其方が寧ろましぢや、あの葬式兼結婚の悪日に会ふよりはといふ Hamlet の憤慨を味へ。 (Ham—Act.1.Scene2)	この開幕の冒頭から彼を囚へてゐるのが Ghost 第三出現直前空気。(Act.1.Scene1) この Spirituality 並に objectivity といふ二ヶ條の報告を第一

	34	35	36	37
―「三」 申し上げます。その噂は、このごろエルシノア王城に幽霊が出るといふ、―（ホレ）―「三」それは、どんな幽霊なんだい？少し気になつて来た（ハム）―「三」	僕は、やつぱり叔父さんを、たよりにしてゐるところもあるんだからね。いい叔父さんだよ。気が弱いんだ。（ハム）―「三」 だけど叔父さんは、悪い人ぢやない。それだけは、たしかだ。小さい策士かも知れないけれど、決して大きい悪党ぢやない。（ハム）―「三」	あの人たちは、もうとしをとつてゐるし、まあ茶飲友達でも作るやうな気持で結婚したんだらうが、僕にはやつぱり何だか、てれくさいな。でも僕は、そんな事は、あまり深く考へないやうにしているんだ。仕様がないぢやないか。人の子として、あれこれ親の事を下劣に詮索するのは許すべからざる悪徳だ。そんな下等の子は、人間の仲間入り出来ない。（ハム）―「三」	僕も、いまの王さまを好きなのです。文化人でいらつしやる。情の厚いお方だと思ふ。（ホレ）―「三」	先王の幽霊が毎晩あらはれえて、かたきをとつてくれつて頼むんださうです。ハムレツトさま、あなたに。（ホレ）―「三」 我輩はクローヂヤスに此のされた、クローヂヤスはわが妃に恋慕し、―（ホレ）―「三」 妃を横取り、王位も共に得んと
なれば、お威徳のあらたかさに、暁告鳥は夜すがら唄ひ、亡者も畏れて出歩かず、真夜中も無事息災、星や変化も魔を使ふ婆も其通力を失ふとやら。（マー）―「第一幕第一場」 御前、昨夜正にお目にかかつたやうに存じまする。（略）御父君に。（ホレ）―「第一幕第二場」 われこそは汝が父の亡霊なれ。（亡）―「第一幕第五場」	父上の亡霊が甲冑姿で！不詳の前表。では隠れた悪行があるのぢやな。（略）悪事はやがて露はれようぞ、たとひ大地が人の目を遮るとも。（ハム）―「第一幕第二場」 とく其仔細をお語りあれ。刹那に千里を走るといふ恋の思ひの翼よりも黙想の羽がひよりも、尚とく飛翔りて復讐せん。（ハム）―「第一幕　第五場」	貞操無二とも見えたりしわが妃を説き惑はし、遂に恥づべき邪淫をげたり！（亡）―「第一幕第五場」		返答は仕らず、尤も、一たびは頭を擡げて何か言ひたげにも相る見えましたが、折から啼き出す鶏の声に戦き縮んで消え失せました。（ホレ）―「第一幕第二場」 どこへ予をつれてゆくのぢや。答へいわしはもう行かぬぞ。（ハム）―「第一幕第五場」
にyoung Hamletへ齊さうとするのはHoratuo等三人の士がこの皇太子を敬慕しかつ信頼してゐたからである。（Hor―Act.1 Scene1）		Hamletの知力の発露として、天晴れである。しかしこの知力を刺激してかやうに働かせたのは彼の情熱である。父の急死を悼み、母の再婚を憎み、また叔父の即位を憤つた情熱である。（Ham―Act1 Scene2） しかし其処ににじみ出てゐるのはHamletの胸底にわき上つてゐた夫婦愛の不純化に対する憤慨心である。（Ham―Act.2.Scene2）	茲に現われてゐるのが彼の表現力の自由自在な使ひわけ、並にそれを通じて彼が振ひ得た人心収攬力の臨機応変振りである。（King―Act.1.Scene 2）	これは妻女の自堕落に対してあらゆるが感ずる人間的の憤りである。 (Ghost―Act.1.scene5) このGhostの意識に於てもまた、生命以上、王冠以上に大事であつたのはその妻女である。原作者の意匠に於て此

して、我輩の昼寝の折に、油断を見すまし忍び寄り、わが耳に注ぎ入れたる大毒薬、といふわけなんですがね、念がいつているでせう？やよ、ハムレツト、汝孝行の心あらば此うらみ、ゆめゆめ忍ぶ事なかれ、と。（ホレ）—「三」

真昼過に、予園内に眠れる折から、油断を見すまし、忍びより、汝の叔父が小瓶より我耳に注ぎ入れし大毒薬の効果は覿面、水銀のやうに、我五体のありとあらゆる血管を走り伝つて血汐に触るるや、乳汁に酢の滴りを注ぐが如く、鮮血忽ち濁りこごつて、滑らかなりし我肌を見る見る掩ふ瘡ふたは、癩病やみをさながらの、目もあられぬ醜さ、穢さ。（亡）—「第一幕第五場」

汝孝子の心あらば、ゆめ此怨を忍ぶ勿れ。（亡）—「第一幕第五場」

劇は権力争奪劇でなない、純然たる人情劇である。（Ghost—Act.1.Sce ne5）

the royal(bedD of enmark)は決して皇室のみに於ける夫婦愛をいふのではない。（Ghost—act.1.Scene5）

38

ハムレツトさまは、恐怖やら疑心やら苦悶やらでとうとう御乱心あそばされたといふ根も葉も無い話でございます。（ホレ）—「三」

お心が悩乱して我等の弁へもあらせられぬ。（ホレ）—「第一幕第五場」

但し彼の意志力は決して単なる意地張りではない、その根底には一つの倫理的確信があつた。（Ham—Act.1.Scene2）

Hamlet の意志力の発動に注目せよ。毫も Ghost に対する恐怖心に壓迫されたのでなく、またその奇怪さに打たれて狼狽したのでもなく、ただその出て来る様子の親しみ易さが強かつたので、それに引附けられて彼の胸中自然に働いて来たのが彼の will 意志力である。（Ham—Act.1.Scene4）

其一は寧ろ字義的なもので、私は常に考へてゐた、あなたの突然の死に対して叔父が何か醜悪な関係を持つてゐるらしいといふのである。（略）

其二はもつと微妙なもので、私は平常叔父を憎んでゐたが、今漸くわかつた、彼はあなたの殺害といふ醜悪かつ悪逆な所業の当人であつた。（Ham—Act.1.Scene5）

39

ハムレツト王家の者、お父さんも、叔父さんも、お母さんも僕も、まるつきり根拠の無い事で、そんなに民に嘲弄されているのは、僕として我慢が出来ん。（略）叔父さんも、可哀そうに。せつかく一生懸命努力しているところなのに、そんな噂を立てられちや、台無しだ。ひど過ぎる。不愉快だ。（ハム）—「三」

僕の父が、幽霊になつてそんな不潔な無智な事をおつしやるやうなお方だと思つているのか。わあ、何もかも馬鹿げている。（ハム）—「三」

おおさ、天に誓うたぞよ！：：あさましき非道の女性！：：たぐひなき大悪（略）：：面に笑をたたへながら、笑みつつも尚かくの如き大悪事を行ふ者世にありとは！ともかくも此テンマークには現の証拠が：：どうぢや、叔父貴、まッ此通り。（ハム）—「第一幕五場」

最前の幻影はな、ありゃ全くの正しい精霊、とばかりいうておく。（ハム）—「第一幕第五場」

40

ホレーショー、僕は今夜、もつと大事な秘密も君に聞ひてもらひたいと思つていたんだけどね、も少しつき合つて呉れないか？今の噂に就いても、もつと話し

さて改めていふぞよ、御身らは予の信友でもあり、学者でもあり、武人でもあるによつて、予の只一つの頼みをば聴いてくりゃれ。（ハム）—「第一幕第五場」

即ち事件の実際を此等の二良友に打明けたくとも、まだ打開けられぬといふ苦心の壓力である。

（Ham—Act.1.scene5）

合つてみたいし、それから、も一つ僕には苦しい秘密があるんだよ。（ハム）―「三」

以前にも、気の弱い、どこか、いぢけたところのある子でしたが、でも、あれ程ではありませんでした。気がむくと、とても奇抜なお道化を発明して、私たちを笑はせてくれたものでした。たいへん無邪気なところもありました。（王妃）―「四」

先王が、おなくなりになつてから、急に目立つていけなくなりました。それに私が、まあ、みつともない事ですが、此デンマークの為とあつて、クローヂヤスどのと、名目ばかりですが、夫婦となつたといふ事も、あの子にとつては意外な事件で、よつぽど気持を暗くさせたのではないないかと思ひます。（略）馬鹿な子ですよ。デンマーク国の王子だといふ、自覚が足りないと思ひます。二十三にもなつて、女の子のやうに、いつまでも、先王や母の後を追つています。（王妃）―「四」

私は、あの子の事に就いては、あの子の、右足の小指の黒い片端爪まで知り抜いているのです。（略）私が此の世で一番愛しているのは、あの子です。（王妃）―「四」

ガーツルード、わしは驚ひたよ。わかつたのです。ハムレットの、いらいらしてゐるわけが、やつと、わかりました。（王）―「四」わしはいまポローニヤスから聞いて、驚ひたのです。まつたく、思ひも寄らぬ事でした。ポローニヤスはわしに、辞表を提出しました。わしは、とにかく一応お預かりして置く事にしましたが、王妃、おどろいてはいけませんよ。落ちついて聞いてください。困つた事です。オフイリヤが、―（王）―「四」

オフイリヤは、妊娠したといふのです。（王妃）―「四」

こよひ見たことどもを、かんまへて外すまいぞ。（ハム）―「第一幕第五場」

仄にはお聞きゃッつらうが、打つて変つたるハムレットが此頃、外なる人も内なる人も、往時には似ぬ変りやうぢや。かやうに我興をも忘るるに至つた事の因は、父王の死去の外には、何としても思ひ及ばぬ。（王）―「第二幕第二場」

覚束なう思ひまする。：：父王の崩御とか、吾等の早まつた婚儀とか、恐らく大筋の事に過ぎますまい。（妃）―「第二幕第二場」

なればこそどうやら嗅ぎ附けました（略）ハムレットさま御喪心の真の理由を。（ポロ）―「第二幕第二場」

手前が此激しい恋の羽ばたきを見また折：：（略）さて王子は発破けられて：：手取早う申しますれば：御憂鬱にならせられ、それからして御断食、それからして御不眠、それからして御衰弱、それから又御喪心、とつい漸々と募らせられて、只今の御狂乱、さてさて歎かはしいことでござる。（ポロ）―「第二幕第二場」

万一にも王子が女をが恋はせられずまたお心も狂うていらせられぬやうでござらば、手前が職を罷めさせられ水飲百姓とも相成りませうず（ポロ）

Queen の speech 全体を通じて Hamlet に対する代名詞は thy,thine,thee である。何れも母親としての情愛の表はれで、唯の一度も you が使はれてゐない。（Queen―Act,1,Scene2）

Queen の言葉に溢れてゐるのは極めて真実かつ単純な母性愛。（Que―Act,1,Scene2）

Hamlet の若さ、強さ、屈託なさを味へ。（Ham―Act,1 Scene4）

Ophelia の so affrighted も、また Hamlet が失恋狂であるかといふ彼女の懸念も、供に Ha mlet のかやうな様子より推察しての事である。（Oph―Act,2,Scene1）

Hamlet がその理性により墜落してゐると原因が万が一にも th ere=his love of her でなければその時こそ私奴は：：と下二行の通りに断言してゐる。（Pol―Act,2,Scene2）

	悲しみと恋が倒錯したのだと思ひます。（王）―「四」	オフイリヤの事は、ポローニヤスが巧みに処理してくれるでせうし、わしとしても出来るだけの事は、してあげるつもでいます。わしたちに任せて置いていいのです。（略）決して悪いやうには、しないつもりです。（王）―「四」 ハムレツトは、イギリスから姫を迎へる事になつてゐるのですから。（王）―「四」	ああ、びつくりした、なんだ、ポローニヤスぢやないか。（ハム）―「五」	ポローニヤスも、おとしをとられたやうですね。往年の知恵者も、僕の乱心などを信じるやうぢや、おしまひだ。（ハム）―「五」 寄つてたかつて、僕を本物の気違ひにしやうとしている。それではポローニヤス、あなた迄が、あの噂を本当に全部、信じてゐるのですね？（ハム）―「五」 さういふ出方をなさらうとは、智慧者のポローニヤスにも考へ及ばぬ事でした。ポローニヤスも、お言葉のやうに、としをとつたものと見へます。（略）気違ひにあつちや、かなはない。（ポロ）―「五」
―「第二幕第二場」	恋ぢや？いやいや、恋ではないわい。只今彼れが言うたことは、聊か條理を欠いてをれど、狂人のやうでもない。何か心中に鬱々と孕み育つるものがあるわい、若しそれが返つたなら容易ならぬことが出来よう。（王）―「第三幕第一場」	彼れをイギリスへ遣すべし、異なる国の山水、風物、見るもの、聞くものが珍しければ、我輿を忘れ果つるまでに蟠つた悩も解けん。（王）―「第三幕第一場」	うん、よう存じてをる。魚商ぢや。（ハム）―「第二幕第二場」	狂人の言ふことながら理が立つてゐる。（ポロ）―「第二幕第二場」 お后の力にも及びませずば、其折、イギリスへなり、また御賢慮のまにまに、幽閉へなり、お移しあらせられて然るべきう存じまする。（ポロ）―「第二幕第二場」
	この老人内心の得意―自分の注意周到さとその娘の従順さとに対する得意の気分が押さへ難くその語気に表はれてゐる。（Pol―Act,2,Scene2) 新王はまだHamletに対して悪意を持つてゐない、ただ転地療養によつて彼の病を治療してやらうと切望しただけである。（King―Act,3,Scene1)			
	Do you know me?Poloniusが Ha mletを気違扱ひした問ひ方―失礼千万な問ひ方。これに対してむかつき乍ら、Hamletは鮮かに応酬した。 (Ham―Act,2,scene2) この奇抜な逆襲をうけてPoloniusはHamlet愈々狂せりと早合点した (Ham―Act,2,scene2) southerly（南風）が今一つのである。この二行の意味は「僕の気違ひはただ一つの主題に対する時だけで、その他の主題に対しては正気ぢやぞ」である。前段の鄭重振りとは違つて手の平をかはす様に、Hamletがその気違ひ振りを見せてゐる。 (Ham―Act,2,scene2)			
	ハムレツトさま、あなたは卑怯です。あなたのおかげで、わしの一家は滅茶滅茶です。わしは田舎にひつこんで貧乏な百姓親			

爺として余生を送らなければならなくなりました。レヤーチーズも、可哀想に。いさんでフランスへ出かけていつたのに、呼び戻さなければなりますまひ。あの子の将来も、まつくら闇です。それから、あの、―（ポロ）―「五」	48	オフイリヤは、僕と結婚します。御心配には及びません。（ハム）―「五」	業因果にや、神ぞ知る。（ハム）―「第二幕第二場」	
	49	二つの問題が、異様にからみ合つて、手がつけられない。オフイリヤどころでは無い、といふのは言ひかたが、まずいので、オフイリヤの事も念頭より離れず、それに今度の恐ろしい疑念が覆ひかぶさり乱雲が、もくもく湧き立ち、流れ、かさなり、僕の乱雲が、もくもく湧き立ち、流れ、かさなり、僕のべは、本当に、一睡も出来ませんでした。発狂したら、いつそ気楽だ。（ハム）―「五」		この劇第一幕の幕落ちと第二幕幕あきとの間には約二ヶ月の間間隔がある。この間に於けるHamletには三重の苦があつた。其一は対Ophelia当面の処置をいかにすべきかといふので、其二は対宮廷差当つての態度をいかにすべきかで、其三は即ち自己胸中の新使命観をいかに具体的に立証すべきかといふのである。(Ham―Act.2,Scene2)
	50	僕は、オフイリヤを愛してゐます。（ハム）―「五」	オフイリヤを愛する此心の深さは、四万人の実の兄が思ふ限りの愛を以ても、決して及ぶことではないわ。（ハム）―「第五幕第一場」	
	51	僕は、とにかくあの噂の根源を、突きとめてみたい。何かがある。きつと、ある。僕には、そんな予感がする。根も葉も無い噂だとしたなら、僕は幸福だ。かへつて、それを機会に、あの人たちに僕の日頃の無礼を素直に詫びて釈然と笑ひ合う事が出来るようになるかも知れない。（ハム）―「五」		二通りの解釈が茲に可能である。其一は寧ろ字義的なもので、私は常に考へてゐた、あなたの突然の死に対して叔父が何か醜悪な関係を持つてゐるらしいといふのである。この第一義の主要要素は憎悪と猜疑である。其二はもつと微妙なもので、私は平常叔父を憎んでゐたが、今漸くわかつた、彼はあなたの殺害といふ醜悪かつ悪逆な所業の当人であつた。(Ham―Act.1,Scene5)然るに事件真相の知識と自己使命の自覚を得て彼がこの第二独白に於て天地に呼び掛けたあと、自ら猛省して発した叫びがこの

	52	53	54	55	56
	ハムレツトさま、あなたは、お若い。あなた達のいつしやる事が、なんだか、わしには信用できない新しい勇気、とおつしやるけれど、勇気ばかりで、もの事が、うまく行くものではありません。（ポロ）—「五」	ハムレツトさま、わしは悪い人間ですねえ。おそろしい事を考へていました。娘の幸福のためには、王をさへ裏切らうとする人間です。（ポロ）—「五」	忍従か、脱走か、正々堂々の戦闘か、あるひはまた、いつはりの妥協か、欺瞞か、to be, or not to be どつちがいいのか、僕には、わからん。わからないから、くるしいのだ。（ハム）—「五」	あの芽がのびて風に吹かれ、白い葉裏をつらつら見せながらそよぐ頃には、この辺いつぱいに様々の草花も咲き乱れます、金鳳花、いらくさ、雛菊、それから紫蘭、あの紫蘭の花のことを、しもじもの者たちは、なんと呼んでゐるか、オフイリヤは、ご存じかな？（王妃）—「六」 でも、男のひとの居る前では気を附けて、死人の指なぞといふ名で呼んでいますの。（オフ）—「六」	先王にも、現王にも、またハムレツトにも、みんなにだまされてゐたのです。デンマークのため、といふ言葉は、なんだか大きい崇高な意味を持つているやうです、私はいつでも、デンマークのためとばかり思つて、くるしい事でも悲しい事でも怺へて来ました。神さまからいただいた尊ひお仕事をしてゐるのだといふ誇りがあつたものですから、ずひぶん淋しい時でも我慢が出来たのです。（王妃）—「六」
	さて、ハムレットさまの御衣はぢや、何がさて、まだお年は若し、婦女とはちがうて、万事伸縮が御自由な御身分ぢやと思や。（ポロ）—「第一幕第二場」	世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや残忍な運命の矢や石投を、只管堪へ忍んでをるが男子の本意か、或は海なす艱難を迎へ撃つて、戦うて根を絶つが大丈夫の志か？（ハム）—「第三幕第一場」	これをば安息日の恵の草ともいふぞや。おお、着け方は更へてぢや。これからこれが雛菊。（オフ）—「第四幕第五場」 斜に生ふる青柳が、白い葉裏をば河水の鏡に映す岸近う、雛菊、いらぐさ、毛茛：：淫なる農夫は汚らはしい名で呼べど、清浄な乙女らは死人の指と呼んでをる：：芝蘭の花で製へた花鬘をば手に持つて、狂ひあこがれつつ来やつたげなが、（妃）—「第四幕第七場」	おお！わしは徒の戯歌作者ぢや。かういふ折に浮かかれいで何としようぞ？あれ御覧ぜ、母上の嬉しさうな顔附、父上がなうなつてから、恰も二時間ぢや。（ハム）—「第三幕第二場」 そなたの語で初めて見た此魂のむくろしさ。何ぼうしても落ちぬ程に、黒々を沁込んだ心の穢れ！（妃）—「第三幕第四場」
Hold,hold,my he Art である。（Ham—Act,1, Scene5）	高等批判能力の発達した青年に共通な強味の表現である。（Ham—Act,2,Scene2）	I am sorry.は Polonius の偽りなき告白。彼はその性根に於て善人である。（Pol—Act,2, Scene1）	To be,or not to be 此行を私は、「どつちだらうか、—さあそこが問題だ」と訳する。（Ham—Act,3,Scene1）	此行に於ける草花の順序は crow-flowers（金鳳花）、nettles（イラクサ）、daisies（雛菊）、並に long purples（紫蘭）であるが、G.Farren によれば、此等四つの一つ一つと又その順序とに意味があるといふ。（Queen—Act,4Scene7）	彼女自身は元来皇族で、先王没後もなほ女王であつた。従つて、軍国多事の際、彼女は依然として責任分担の当事者であつた。（Queen—Act,1, Scene2）

57	からだの具合も、さいはい今朝から、こんなにすつきりして来ましたし、これからは、いじけずに、昔のとほりにお転婆なオフイリヤになるのです。（オフ）—「六」			この場合に於けるOpheliaのその兄に対する親しみの感じを味はへ。この問答に現はれてゐるのは彼女に持前の軽妙な sense of humor である。（Oph—Act1,Scene3）
58	せめて、ハムレツトだけでも、しつかりしてゐてくれるといいのですけれど、あの子は、あなたの事で半狂乱の様子ですし、他の人だつて、自分の地位や面目の事ばかり心配して、あちこち走り廻つてゐるやうな具合ですから、ちつとも頼りになりません。（王妃）—「六」	なう、オフィリヤ、ハムレットの心が狂うたのは和女の標致ゆゑであれかしと念じまする。すれば和女の優しい気立が彼れを正気にする縁ともなり、二人が面目ともならうゆゑに。（妃）—「第三幕第一場」		
59	わたしは兄を、決してきらひではないのですけれども、でも、兄に何でも打ち明けて語らうといふ親しい気持ちは起こりません。父に対しても同じ事でございます。（略）肉親に、したしみを感じないで、かへつて、—（オフ）—「六」		和子ハムレットの妻ともならせます日を頼うでゐたのに。（妃）—「第五幕第一場」	To the noble mind, Ophelia の自覚を見よ。王 Claudius や父 Polonius に利用されつつあるといふ事に彼女自身は全く無意識である。 （Oph—Act,3, Scene1）
60	あなたが、ハムレットを拒み得なかつたのも、ハムレツトの身分のせいです。王妃の大事な子供だから、あたしも大事にしやうと思ひました等といふ突飛な意見は、私ひとりは笑つて聞き流してあげますが、他のひとにそんな事を云つたら、あなたは白痴か気違ひ扱ひにされてしまいます。（略）あなた達は、自分の俗な野心を無邪気な甘へた云ひ方で、巧みに塗りかへるから油断がなりません。うつかり、だまされます。（王妃）—「六」			
61	あなたも、ハムレットの影響を受けたのでせう。第一の高弟とでもいふところでせうか。ホレーショーだけかと思つたら、あなたも、なかなか優秀なお弟子さんのやうです。（王妃）—「六」 このごろあちここちにハムレットのお弟子があらはれてゐるさうですね。ホレーショーは、あれは前からハムレットに夢中で、口の曲げかたまでハムレットの真似をしてゐたのですが、この	彼れを手放しておくは如何にしても危い。さりとて分別なき愚民らが深く彼れを愛してをれば、厳しひ刑にも行ひがたい。（王）—「第四幕第三場」 次に、表立つて罪を問ひにくい第二の仔細は、彼れに対する愚民等の愛着らや。（王）—「第四幕第七場」		

ごろはまた、わかい女のお弟子も出来たさうです。それからまた、ただいまは、おじいさんのお弟子も出来たやうです。（王）—「八」	62 でも、オフイリヤの事なら、まう御心配いりません。あたしは、ハムレツトさまのお子を育てます。（オフ）—「六」	63 入歯のおふくろが、横恋慕されたといふのも相当な喜劇だ。（略）ポローニヤスは、此の朗読劇に、王と王妃を招待して、劇の進行中にお二人が、どんな顔をなさるか、ためしてみやうと魂胆なのだが、馬鹿な事を考へたものだ。（ハム）—「七」	64 あいつは、本当に正直な男だ。自分の感情を、ちつとも加工しないで言動にあらはす。どんなへまを演じても何だか綺麗だ。いやらしいところが無い。しんから謙虚な、あきらめを知つてゐる男だ。それに較べて此の僕は、ああ、馬鹿だ。（ハム）—「七」ホレーショーどのなんかは、淡白で無邪気で、本当に青年らしい単純な夢の中で生きてゐます。少しは見習ひなさいよ。ホレーショーどのは、まう、此の朗読劇の底の魂胆を忘れてしまつたかのやうに、ただただ、芝居するといふ事の嬉しさに浮かれ、あんなに熱心に稽古をしていたぢやありませんか。あれでいいのです。（ポロ）—「七」	65 このごろ僕には、人間がいよいよ可哀想に思うはれて仕様がないんだ。（ハム）—「七」
	すりや、それが為に、むざむざ大切な父を失ひ、剰へ妹まで狂人にしてのけたか！（レヤ）—「第四幕第七場」	分別盛りのお年齢、狂ふ血は鎮まつて事々に分別のあるべきに、何として此像から此像へお心が移つたぞ？情欲があるからは、感覚も必ずあるべきに、其感覚が麻痺ましたか？（ハム）—「第三幕第四場」 明日の晩に演じてほしい。事によつたら、十二行乃至十六行程の白を予が書下して挿入れようと思ふが、何と暗誦えておくりやらうかの？（ハム）—「第二幕第二場」 今宵、王の前で、演劇を催す筈、其一場面は、我父の最期の様によう似てをる。幕が開いたら、魂を凝し、叔父者の様子を窺つてたもれ、（ハム）—「第三幕第二場」	ホレーショー、おぬしこそは予が交際うた人の中の真の君子ぢや。（ハム）—「第三幕第二場」	人間は、ま、何たる造化の妙工ぢゃ！理智には秀で、能力には限りがない！風姿といひ、学動といひ、いみじうもあり！行為は天使の如く、智慧は神に
			以上の一段によつて、HamletとHoratioとがその性格に於て正反対である事がわかる。(Ham—Act3,Scene2)	

	66	67	68	69	70
	今宵は、イギリスのある女流作家の傑作『迎へ火』といふ劇詩を演出して御覧にいれまする。（ポロ）—「七」	よして下さい。ハムレツト、いい加減に、およしなさい。これは一体、誰の猿智慧なんです？ばかばかしくて見て居れません。だうせ、いやがらせをなさる積もりなら、ま少し気のきいた事をやつて下さい。あなかがたは卑怯です。陋劣です。私は、おさきに失礼します。なんだか、吐きさうになりました。（王妃）—「七」	ちつとも怒る事は、ありません。面白いぢやないか。まだ此の続きもあるやうです。（王）—「七」さあ、ガーツルード、それでは、わしも一緒に失礼しませう。いや、なかなか面白まつた。（王）—「七」	君は陰険です。それも、つまらぬ小細工ばかり弄して、男らしい乾坤一擲の大陰謀などは、まるで出来ない。ポロ—ニヤス、少しは恥ずかしく思ひなさい。あんな、嘴の青ひ、ハムレツトだのホレーショーだのと一緒になつて、歯の浮くやうな、きざな文句を読みあげて、いつたい君はだうしたのです。何が朗読劇だ。（王）—「八」	とにかくあの芝居は、いや、朗読劇か、とにかくあの、くだらない朗読劇は、君の発案ではじめたものに違ひない。わしには、
	も似た人間！その人間が、予に取つては、只の塵埃ぢや。（ハム）—「第二場」	卿よ、おぬしは、むかし、大学で演劇を演たとかお言やつたなう。（ハム）—「第三幕第二場」 ヂュリヤス・シーザーを演じまして神殿で殺されました。ブルータスが殺しをりました。（ポロ）—「第三幕第二場」 彼奴は王位を奪はうために園内で王を毒殺しをる。王はゴンザゴーといふで真実有つた話ぢや、巧妙なイタリー語で綴つてある。（ハム）—「第三幕第二場」	俺は卑怯者か？俺を悪漢と呼ぶのは誰ぢや？（ハム）—「第二幕第二場」 妃がちと言過はすまいかと思ひます。（妃）—「第三幕第二場」 御母君御諚には、今夕の御挙動には、殊の外御驚愕遊ばされましたようにございます。（ロー）—「第三幕第二場」	あれ、王がお起ち遊ばす！（オ）—「第三幕第二場」 何ぢや。偽の火を怖しう思うてか！（ハム）—「第三幕第二場」	お奥に渡らせられまして後、きつう御不快の御気色にあらせられまする。（ギル）—「第三幕第二場」	放し飼の狂犬をば、早う鎖に繋ぎたいわい。（王）—「第三幕第二場」
			王はその突然の退場のの註釈を不消化からの眩暈にあると云つたが、王のこの誤魔化しに掛かからなかつたのが唯Hamlet とHoratio との二人である。（Ham—Act3,Sc ene2）		あの劇中劇の鼠落しにかかつて以来、Claudius が Hamlet に対する感じは一転して恐怖となつてゐる。

ちやんとわかつています。ハムレツトだつて、ホレーショーだつて、もつと気のきいた台本を択びます。身震ひせざるを得ないくらゐの古くさい台本は、君でなくては、択べません。何もかも、君の仕業です。(王)—「八」若い者をそそのかし、飛語を撒きちらして、忠誠も御恩報じもないものだ。ポローニヤス、君の罪は、単に辞職くらゐでは、すまされません。(王)—「八」

(King—Act3,Scene3)

71

ご自分が恋していらつしやると、人も皆、恋してゐるもののやうに見えるらしい。とにかく、その、嫉妬とかいふお言葉だけは、お返し申し上げます。ポローニヤスは、男やもめの生活こそ永く致してまひりましたが、不面目の色沙汰ばかりは致しませぬ。王さまこそ、へんな嫉妬をなさつて居られる。(ポロ)—「八」

Polonius の言葉に対して観察すべき事が二つある。其一は彼が完全に無邪気かつ正直で、彼の茲の言葉に毛頭の偽りも飾りもない事である。其二は同時に彼がかほどにおせつかいだつたので、此後Hamletが誤つて彼を殺した時に、我々はそれを深くも咎める気持になれない事である。

(Pol—Act3,Scene3)

72

ゆるせ。殺すつもりは無かつたが、つひ、鞘が走つて、突き刺した。(略)前後のわきまへも無く短剣引き抜き、突き刺した。ゆるせ、君の言葉も過ぎたのだ。

(王)—「八」

あつ！誰だ！そこに立つてゐるのは誰だ！逃げるな、待て！おお、ガーツルード。(王)—「八」

ああ、もし、わが夫、世にも怖しい目をば見ました！(妃)—「第四幕第一場」

浪と暴風とが闘ふやうに、狂ひ騒ぐ狂気の余り、物陰に何者か動くを見つけ、剣を抜いて走り寄り、鼠々！といふやいな、見さかひもない乱心から、帳の陰の老人を突殺してのけました。(妃)—「第四幕第一場」

何の値打もない岩の間に黄金の脈が煌くやうに、狂気の中にも真情はあると見え、殺したことを歎いてをります。(妃)—「第四幕第一場」

ハムレットが狂気の余りポローニヤスを殺害し、妃の居間より何処へか引行きたり。(王)—「第四幕第二場」

As kill a king.自分が rash にも今殺したのは the King ではなくて Polonius であつたと知つて、それが bloody as bad であつたと自覚すると同時にHamletが立処にその母の胸に向けたのはこの電光石火の鋭鋒である。

(Queen—Act3,Scene)

73

さうか。ポローニヤスが、昨夜から姿を見せぬか。それは少し、へんだね。でも、まあ、たいした事は無からう。大人には、おとなの世界があるんだ。見え透ひた権謀術算を、見破られてゐると知りながらも、仔細らしい顔つきをして、あつちでひそひ

死体は如何なされましたぞ？(ロー)—「第四幕第二場」

もし、死体は何処へおかくしなされました。是非共にお知らせあつて、吾々と共に王の御前へ。(ロー)—「第四幕第二場」

ポローニヤスは何処にをるぞ？(王)—「第四幕第三場」

例へば Polonius 一件に於ても自己の所業の大義名分はこれを明かにせねばならぬ。あの誤殺は全く自分の感違ひの結果であつたにせよ、その行為の責任は十分に自ら負はねばならぬ。(Ham—Act4,Scene4)

そ、こつちでこそこそ、深く首肯き合つたり、目くばせしたり、なあに、たいした事でも無い癖に、つまりその策略の身振りが楽しくて、こたへられないばかりに、矢鱈に集まつては打合せとかいふ愚劣な芝居をしたがるものさ。叔父さんも、ポローニヤスも、こせこせした権謀術算を、なかなかお好きなやうだから、二人でゆふべ打合せて、また何か小細工をはじめてゐるのかも知れぬ。（ハム）—「九」

どうも、あの人たちのする事は、あくどくていけない。そんなにまでして僕たちを、だまさなければいけないのか。僕たちのほうでは、あの人たちを、たのみにもしてゐるし、親しさも感じているし、尊敬さへもしてゐるのだから、いつまでも気をゆるして微笑みかけているのに、あの人たちは、決して僕たちに打ち解けてくれず、絶へず警戒して何かと策略ばかりしているのだから、悲しくなる。なんといふ事だ。（ハム）—「九」

叔父さんとポローニヤスは、悪の一味だ。（ハム）—「九」

父がゆふべから姿を見せぬので、少し心配でございますが、でも、あたしは、父を信じて居ります。ハムレツトさまのおつしやるやうな、そんな悪い人ではございません。（オフ）—「九」

でも、きのう王妃さまからさまざま優しいお言葉をいただいて、すつかり元気になりました。からだの具合も、きのうから、別の人のやうに、すつきりしてまゐりましたし、もういまでは、ハムレツトさまのお子さまを産んで、丈夫に育てるといふ希望だけで胸が一ぱいでございます。あたしは、いまは幸福です。とても、なんだか、う

天に。使を遣つて御覧ぜ。もし其使が能う逢はなんだら、もう一ヶ所を御自分でお尋ね。それでも今月中に見つからなんだら、表広間へ行く道の階子あたりで、彼奴め、きつと匂ひをるであらう。（ハム）—「第四幕第三場」

但し私が茲に長蛇を逸すと形容するのはあの祈祷の苦心中の Claudius を見逃した事をさすのではない。それは Ha mlet にとつて寧ろ勝利的得意の場面で、私が茲に無限の遺憾といふのはあの Polo mus 殺しの失態をさすのである。其一件の当面の責任上、已むを得ず彼は英国行に出発せんとしてゐる。(Ham—Act4,Scene4)

従つて茲の a vice も、kings も、倶に芝居用語で、この一句に托されてゐる Hamlet の意味は叔父 Coaudius なんど真の国王の柄ではないただ王様の真似をする役者の一人だ。しかもそのうちで一人悪徒役にすぎないといふのである。(Ham—Act3,Scene4)

ホレーショー心狂ひたるオフィリヤをつれて出る。（第四幕第五場）

踵を接ふる不幸と不幸。：：レヤチーズよ、其方の妹は溺れて死にやつた。（妃）—「第四幕第七場」

さすれば自暴自棄で死をつた其女子を本式通りに葬るといふか？（王）—「第五幕第一場」

あの女子は、結句、自身合点の上で身ィ投げたものとせにゃならんわ。（王）—「第五幕第一場」

Ophelia 狂乱の唯一の原因はその父の死であつた。Hamlet の気違ひといふ仮定が彼女をしてまた気違ひにさせたといふ説は無根拠である。(Pol—Act3,Scene3)

I will not speak with her.彼女乱心の現状に関するこの宮官の言上を聞いて、女王は自身面会の意志なしと言ひ切つた。(Queen—Act4,Scene5)

れしいの。これからは、昔のお転婆なオフイリヤにかへつて、誇りを高くもつて、考へてゐる事をなんでもぼんぼん言はうと思ふの。（オフ）―「九」

77

僕は、絶対に詭弁家ではない。僕は、リアリストだ。なんでも、みな、正確に知つてゐる。自分の馬鹿さ加減も、見つともなさも、全部、正確に知つてゐる。そればかりでは無い。僕は、ひとのうしろ暗さに対しても敏感だ。（略）僕には高邁なところが無い。のらくらの、臆病者の、さうして過度の感覚の氾濫だけだ。こんな子は、これから一体、どうして生きて行つたらいいのだ。（ハム）―「九」

予などは、随分正直な生得ぢゃが、母御が生んでくれられなんだらと怨めう思ふ程に、高慢で、執念深うで、野心が激しうて、自身で許しさへすれば、夥しう悪事をもしかねぬ。ただそれを調整へる悪事もしかねぬ。ただそれを調整へる思案とそれに像を附くる想像とそれを行ふ時と場合とが無いばかりぢや。（ハム）―「第三幕第一場」

78

オフイリヤ、僕が叔父さんや、お母さんや、またポローニヤスの悪口を云ふのは、何もあの人たちを軽蔑してゐるからでは無いのだ。僕には、そんな資格が無い。僕は、うらめしいのだ。いつも、あの人たちに裏切られ、捨てられるのが、うらめしいのだ。僕は、あの人たちを信頼し、心の隅では尊敬さへしているのに、あの人たちは、へんに僕を警戒し、薄汚いものにでも触るやうな、おつかなびつくりの苦笑の態度で僕に接して、ああ、あの人たちは、そんなに上品な人たちばかりなのかねえ、いつでも見事に僕を裏切る。打ち明けて僕に相談してくれた事が一度も無い。大声あげて、僕をどやしつけてくれた事もかつて無い。どうして僕を、そんなに、いやがるのだらう。僕はいつでもあの人たちを愛している。愛して、愛して、愛している。いつでも命をあげるのだ。（ハム）―「九」

79

小理屈を覚へた女は、必ず男に捨てられますよ。パウロが言つていますよ。われ、女の、教うる事と男の上に権を執る事を許さず、ただ静かにすべし、と

こりや寺へ往きや。寺へ。（略）人は悉く怖しい悪漢ぢゃ。誰れをも頼に為やるな。尼寺へお往きやれ。（ハム）―「第三幕第一場」

おお、神々さま、どうぞ王子をお救ひ

Lose not thy nature

Coleridge 以下 Romantic 派の批評家が概ね Hamlet の性格を誤解した一ケ條が茲にある。（略）その母の再婚行為を憎悪しつつ、Hamlet は尚ほ彼女に接するに飽く迄も自然の人情を以てしようと努力してゐる。茲が即ち彼の性格の firm な処である。沙翁が描いた儘の Hamlet にはかやうな男らしさの剛毅性がある。（Ham―Act3,Scene2）

彼はまだ彼女を mother とは云はない。今や彼の態度は子としてのそれでなく、検事としてのそれである。かく答へ乍ら、彼女の顔をじつと見つめつつ、彼が見届けたのは彼女が前王殺しの秘密に通じてゐない事である。これ以来鋭鋒一転、彼が繰返し繰返し彼女に対して答めてゐるのはその近親相姦の罪悪である。（Ham―Act3,Scene4）

Gertrude に対する Hamlet の小供心が復活してゆくを見よ。彼はその少年期以来彼女より the mothers blessing をうけるのを習慣とした。その情に於て、彼は心からの親子になりたかつた。但し情の満足を求むる前に、彼がまづ明らかにしようとしてゐるのは義理である。（Ham―Act3,Scene4）

To a nunnery, go.

（Ham―Act3,Scene1）

ね。そうして、女もし慎みと信仰と潔きとに居らば、子を生む事に因りて教はるべし、と云ひ結んである。人にものを教へやうと思つたり、男の頭を押へやうとしないで、ただ、静かに、生れる子供の事を考へていなさい、といふ意味だ。いい子だから、二度と再び、変な理屈は言はないでくれ。世界が暗くなつてしまふ。察するところ、お母さんから悪智慧を附けられて、妙な自信を得たのだらう。お母さんは、あれで、なかなか理論家だからね。いまに、パウロの罰を受けるぞ。こんど君が、お母さんに逢つたら、かう云つてやつつてくれ。言葉の無い愛情なんて、昔から一つも実例が無かつた。本当に愛してゐるのだから黙つているといふのは、たいへんな頑固なひとりよがりだ。（略）言葉の無い愛情なんて、古今東西、どこを探してもございませんでした、とお母さんに、さう伝へてくれ。愛は言葉だ。言葉が無くなりや、同時にこの世の中に、愛情も無くなるんだ愛が言葉以上に、実体として何かあると思つていたら、大間違ひだ。聖書にも書いてあるよ。言葉は、神と共に在り、言葉は神なりき、之に生命あり、この生命は人の光なりき、と書いてあるからお母さんに読ませてあげるんだね。（ハム）

―「九」

いいえ、決して王妃さまから教へられて申し上げているのではございません。（略）あたしには、だうしても、ハムレツトさまのおつしやる事は、信じられません。神さまが、居ります。神さまは、黙つていて、さうして皆を愛して居ります。神さまは、おまへを好きだ！なんて、決して叫びはいたしません。けれども、神さまは愛して居ります。みんなを、森を、草も、花も、河も、娘も、おとなも、悪い人も、なされて！（オフ）―「第三幕第一場」

もし嫁入を為やるなら、祝儀物の代りに、此呪詛をくれてやらう。：：仮令和女が、氷のやうに清浄であらうと、雪のやうに潔白であらうと、世の悪口はまぬかれぬぞよ：：寺へ往け、寺へ。（ハム）―「第三幕第一場」

おお、神々さま、どうぞお正気にお戻しなされて。（オフ）―「第三幕第一場」

語は空へ上つても、心めが地を離れ。心にはぐれた語は天へは達かぬ。（王）―「第三幕第三場」

やや、わりゃ邪宗門か？お聖書さまの中に「アダムが掘らしつた」と書いてあるわさ。（王）―「第五幕第一場」

あの髑髏にも舌があつて、嘗ては唄ども能い歌うたであらうものを、元祖の殺人者ケインが頤骨ででもあるやうに、彼奴めが叩きつけをる。（ハム）―「第五幕第一場」

みんなを一様に、黙つて愛して居ります。（オフ）—「九」
おさない事を言つている。君の信仰しているものは、それは邪教の偶像だ。神さまは、ちやんと言葉を持つて居られる。考へてごらん。一ばんがじめ僕たちに、神さまの存在を、はつきり教へてくれたものは、なんだらう。言葉ぢやないか。福音ちゃないか。キリストは、だから、—（ハム）—「九」

ああ、ハムレツト。はじまりましたよ。戦争が、はじまりましたよ。レヤーチーズの船が、犠牲になりました。（略）レヤーチーズたちの乗つて行つた船が、カテガツト海峡に、さしかかると、いずこからともなく、ノーウエーの軍艦が忽然と姿をあらはし、矢庭に発砲したといふ。（王）—「九」

レヤーチーズは、悲壮にも船と運命を共にしたのです。惜しい男だ。父に似ぬ、まことの忠臣、いや、父の名を恥ずかしめぬ天晴れの勇者です。（略）レヤーチーズは、尊び犠牲になつてくれました。父子そろつて、いや、レヤチーズの霊は必ず手厚く葬つてやらう。それが国王としてのわしの義務だ。（王）—「九」

レヤーチーズ。僕と同じ、二十三歳。竹馬の友。少し頑固で怒りつぽく、僕には少し苦手だつたが、でも、いい奴だつた。死んだのか？オフイリヤが聞ひたら卒倒するだらう。ここにいなくて、さいはいだつた。レヤチーズ。その身に箔をつけるため、将来

これは何方の御軍勢でござるの？（ハム）—「第四幕第四場」
ノーウェー国のでござる。（旗）—「第四幕第四場」

ポローニヤスが非業の最期、自ら招いた科とはいへ、和子が海外への流寓、予思慮足らずして密に死体を埋めしため愚民らが邪推の騒擾、オフィリヤが我輿の歎き、非情にひとしき狂気の体とりわけて心懸りは彼れが兄なるレヤチーズ、ひそかにフランスより帰り来り、道路の飛語に動されて、深くも予を疑ふ様子。（王）—「第四幕第五場」
大津波の寄せたる如く、暴徒をひきゐてレヤーチーズが、宮中へ乱入いたし、官人らを撃靡かし、唯今にも此処へ。（臣）—「第四幕第五場」
父御を殺した者が予をも殺さうと企てた仔細が斯く明白となつた上は、もはや予を疑ふ心は解けて、無二の信友とも予を思やるが当然ぢゃぞよ。（王）—「第四幕第七場」

やい、妹、そちが狂気の此怨は、此兄が天に誓ひ、量に掛けたら秤皿の顚覆るまで報うてやるぞよ。（レヤ）—「第四幕第五場」
おぬしの才芸一切よりもハムレットは只それをこそ嫉ましう思うた様子（王）—「第四幕第七場」
あれはレヤーチーズぢゃ、立派な若

性来活動的な青年として、彼によく嵌つてゐるのはこの対比的の引き立役である。
(Act1,Scene3)
凡そ事件の原因や由来を見届けてかかつてるのが
Hamlet の性格、然るに
Laertes の方は事件の影響の

のおのれの出世に備へて、フランスに遊学の途端に、降つて湧ひた災難、その時とつさに自分の野望をからりと捨てて、デンマーク国の名誉を守るために、一身を犠牲にして悔いる色が無かつた。僕は、負けたよ。レヤチーズ。君は、僕がきらいだつたね。僕だつて、君を好ひてはいなかつた。（略）僕たちは、幼ひ時から、はげしい競争をして来た。好敵手だつた。表面は微笑み合ひながらも、互ひに憎んでいた。僕には、君が邪魔だつたよ。けれども、君は、やつぱり、偉ひやつだ。（ハム）—「九」

はじめて、父上と呼んでくれましたね。さすがにデンマーク国の王子です。国のためには、すべての私情を捨てませう。（王）—「九」

ハムレツト、あの城中の噂は、事実です。いや、わしが、先王を毒殺したといふのは、あやまり。わしには、ただ、それを決意した一夜があつた、それだけだ。先王は、急に病気でなくなられた。ハムレツト、君はそれでもわしを、罰する気ですか？恋のためだ。くやしいが、まさに、それだ。ハムレツト、さあ、わしは全部を云ひました。君は、わしを、罰するつもりですか？（王）「九」

者ちゃ。見てゐい。（ハム）—「第五幕第一場」

これ、レヤーチーズ。何故に足下は予を此様に扱ふのぢゃ。予は足下を愛してをつたのに。：：はて、闘ふことはない。（ハム）—「第五幕第一場」

されはさうと、ホレーショー、予はレヤーチーズに対し、我れを忘れ、」無礼を働いたを後悔するわい。我身の上に引当て、彼れが心根を思ひやる。仲直りをしてくれいと言はう。（ハム）—「第五幕第二場」

何とホレーショー：：驚き入つたる王が姦計！デンマークの為にも、イギリスの為にも、ほッ！予を生かし置くは怖しき事の限りなれば、此書一覧次第、寸時の猶予も無く、斧を磨ぐ間もあらせず、立地に予が首を打落せ、と種種様々な口実をば繕ひ立てし王が厳命。（ハム）—「第五幕第二場」

いかに妃、御身と予とが、互ひに深う相思うて、ハイメン神の許を受け、妹背の契を結びてより、太陽の太神の御車は、ネプチューン神の潮路をも、テラス神の圓陸をも、三十度までこそ廻行りたれ、（ハム—劇の王）—「第三幕第二場」

此世界開けて最先の大逆罪：：兄殺し！（略）此上は神に縋らう。俺の科過去の事ぢゃ。：：が何というて祈つたものであらう？非道の毒害をゆるさせられませ？（王）—「第三幕第二場」

また予に取つては、徳か不徳かは知ら

先きへ先へと走つてゐる。原作者はこの対比をあざやかに反映させてゐる。（Laer—Act4,Scene5）

Laertes その気質に於ては活動力満々、但しその性格に於ては思慮分別の手綱なき

Laertes との対照がますます

Hamlet を引立たせてゐる

（Laer—act4,Scene5）

老人の生命の脆さは或は諦め得るべきも、若い乙女の理性喪失は迚も諦め得られぬ。父の急死の辛さは老人の事として強ひて我慢をするが、断じて我慢出来ぬのは妹のこのいじらしい様子だといふ意味。

（Act4,Scene5）

作者が茲に印象深く描き出してゐるのは Laertes の不信義である。この数行の言葉—武士道の体面心にかけての言葉に拘らず、彼は事実上自ら切先附き、また毒薬附きの剣を使はうとしてゐる。この不誠実、不信義は明らかに武士道の名節尊重心を犯したもの。

（Laer—Act5,Scene2）

これ以来いかな悪辣な手段を用ひてでも、彼は Hamlet をなきものにしようとした。この独白のあとに当然来るべき彼の窮策は Hamlet 暗殺の陰謀姦計である。（King—Act3,Scene3）

Claudius と Gertrude とは相互熱愛の間柄で、my queen が即ち彼の所有欲の climax である。新王にとつての原動力はこの情熱で、その兄殺し事件は決して一種の冷血的所行でなない。かやうにしてこの悲劇は、其実、一つの大きな人情劇、否、人間劇である。

（King—Act3,Scene3）

he cups 複数に注目せよ。Hamlet に与ふべき cup をも手元に置いて臨機に毒を入れ

	85	ず、妃は我命の綱ぢゃ。星の星座を能う離れぬが如く、予また妃を離れては、恐らくは存へがたい。（王）—「第四幕第七場」 何と、此上は、当然の事では無いか：我父王を殺し、我母を弄び、我極の望を遮り、剰さへ如是奸譎な手段を以て我一命まで釣らうとし奴：かかる奴を誅戮するは天の命る所ではないか？（ハム）—「第五幕第二場」 ：：さ、往かう、イギリスへ！（ハム）—「第四幕第四場」 むむ、切先に：：毒までも塗つたるよな：：ならば見事、毒の効果を！ト王を目がけて飛びかかり王の胸元を貫く。（ハム）—「第五幕第二場」	新王の気分は Hamlet の病気療養を望むよりも、もはや彼を自分より遠ざけたがつてゐた。(Ros—act3,Scene3) superfluous 王が屈托の理由は自分一人の為のみではない。Ophelia のためでもある。(King—act4,Scene5) Hamlet は此時初めて聞き知つた Ophelia の死を傷み、また今耳にした Laertes の大言を怒つて、激昂の余り、殆ど気狂はんとしたっ。（Laer—Act5,Scene1) Claudius の女王に対する切な愛情を示してゐる。かやうな熱愛を懐いてゐる王の毒杯を自らのんで、そのために自ら倒れたのは彼女にとつて正しく悲劇的である。（Ham—Act5,Scene2)
	86	あ！ハムレツト、気が狂つたか。短剣を引き抜き、振りかざすと見るより早く、自分自身の左の頬を切り裂ひた。（略）オフイリヤの事なら、心配せんでもよいのに、馬鹿な奴だ。君が凱旋した時には、必ず添はしてあげるつもりだ。泣く事はない。戦争がはじまれば、君も一方の指揮官なのです。そんなに泣いては、部下の信頼を失ひますよ。（王）—「九」 取り乱した姿で、ごめん！ああ、王妃さまが、あの庭園の小川に、—（ホレ）—「九」 気が弱い。わしを助けてくれる筈の人が、この大事の時に、馬鹿な身勝手の振舞ひをしてくれた。わしが悪いのではない！あの人が、弱かつたのだ。他人の思惑に負けたのだ。（王）—「九」	あの此うち妃毒に中り倒れる。「第五幕第二場」	王は大罪人である、同時に彼の良心の働きは極めて鋭敏で彼は断じて偽善者ではない。(King—act3,Scene1) 既に対 Gerteude の精神的疎隔に陥つて、Claudius が今や追求しつつあるのは King としての幸福である。しかも内心に於て彼はそれにまた絶望してゐる。(King—Act4,Scene3) 王は自ら Hamlet 側に立つてゐるやうに響かせてゐる。その腹黒さを見よ。(King—Act5,Scene2)
	87	汚辱の中にいながらも、堪へ忍んで生きている男もいるのだ。死ぬ人は、わがままだ。わしは、死なぬ。生きて、わしの宿命を全うするのだ。神は、必ずは、わしのやうな孤独の男を愛してくれる。強くなれ！クローヂヤス。恋を忘れよ。虚栄を忘れよ。デンマーク国の名誉、といふ最高の旗じるし一つのために戦へ！ハムレツト、腹の中では、君以上に泣いてゐる男がいますよ。（王）—「九」 懺悔には如何な罪をも滅すといふ。（略）助けたまへ、神々！（王）—「第三幕第三場」 おお、助けてくれ、人々。まだ手疵を負うたばかりぢゃ。（王）—「第五幕第二場」		

88	信じられない。僕の疑惑は、僕が死ぬまで持ちつづける。（ハム）―「九」	我が亡き後に如何なる悪名、仔細が知れずば、残らうもはかりがたい。われをふ真心あらば、しばらく至幸に遠ざかり、憂世に苦しき命延かり、我がために一部始終を：：（ハム）―「第五幕第三場」 邪侈、残忍、不倫の行為、つづいて不慮の裁断、まつた思はぬ殺戮、余儀なき苦肉の計略乃至大詰の此惨劇、企み者の頭上に応報せし一部始終を小官つぶさに弁じませう。（ホレ）―「第五幕第二場」	actsは女王と王の醜行、並にHamlet父子に対する彼の非人情至極の罪悪行為。（Hor―Act5,Scene2）

〈考察〉拙論「〈ハムレット〉の系譜―太宰治『新ハムレット』考」（斎藤理生／松本和也編『新世紀太宰治』二〇〇九年六月　双文社出版）における注目ポイントを次に挙げる。

①クローヂヤスの先王（兄）殺しについて

「先王殺し」は、復讐劇「ハムレット」の重要な要素である。表①84と表②54の比較から、「先王殺し」が大前提となる浦口「ハムレット」、坪内「ハムレット」、小林「ハムレット」とは異なる『新ハムレット』の一面を確認することができる。殺意を認めながらも、実行していないと主張するクローヂヤス像の形成は志賀「ハムレット」に共通する。この志賀から太宰への流れを重視すれば、「クローディアスの日記」に強調された「疑惑」の構図が『新ハムレット』の悲劇の核として意識されていたことが見て取れる。

②作品の収束地点について

クローヂヤスの先王殺しを確信するハムレットの正義と憎悪によって展開するそもそもの物語は登場人物が互いに殺し合うという悲劇をもたらす。表①84～88と表②54～58をみれば、『新ハムレット』はその収束点を従来の悲劇とは異にする。そこには単純な〈死の連鎖〉という悲劇から逸脱した新たな悲劇を目指す『新ハムレット』の方向性が読み取れる。

③「言葉」への関心について

表②34に注目すれば、『新ハムレット』には小林「ハムレット」にだけ確認できる「言葉」への拘りがある。小林「ハムレット」では「言葉」の限界性を示している。『新ハムレット』はさらにそこから神格化、絶対化された「言葉」を想定し、それに縋ろうとするハムレット像を立ち上げている。

④聖書、キリスト教との関連について

『新ハムレット』と二作品の相違点として重要なのは表①79と表②51である。「nunnery」を忠実に訳した他四作品とは異なり、『新ハムレット』に「寺（尼寺）へ行け」との表現は出てこない。その代わりに「テモテへの手紙一」第二章一五節の聖句が引用される。この聖句の利用は、『新ハムレット』にだけ描かれるオフキリヤの妊娠にも関わる。ハムレットの子を生み育てる決意を固めるオフキリヤ像を設定することで引用した聖句が実体を持つ「言葉」として意味を持つことになる。「言葉」が一つのキーワードとなり、確かな「言葉」を求めつつもその「言葉」自体に裏切られていくハムレットが作品に描かれていく。

表②〈ハムレット〉の系譜―志賀直哉・小林秀雄から太宰治へ

	「新ハムレット」	「クローデイアスの日記」	「おふえりや遺文」
1	先王が、まことに突然、亡くなつて、その涙も乾かぬうちに、わしのやうな者が位を継ぎ、また、此の度はガーツルードと新婚の式を行ひ、わしとしても具合の悪い事でしたが、すべて此のデンマークの為です。（王）―「一」	兄の死後その妻を直ぐ妻として自らその王位に直つた、単にその生活の変化から云つても何となく自分は常と同じ調子では過ごせない。まして久しい恋―それには殆ど望みを断つてゐた恋を得た喜びには自分の心の均衡を失はずにはゐられない。	
2	君は、ウイツタンバーグの大学へ、また行きたいと云つていましたね。でも、それは泳へて下さい。わしからお願ひします。君は、もうすぐ此のデンマークの王位を継がなければならぬ人です。（略）それゆへ君は、いまからわしの傍にいて、少しづつ政治を見習ふやうに心掛けなければいけません。いや、わしを助けてもらいたいのです。（王）―「一」	兎も角も、ウイツテンバーグの大学へ行く事を思ひ止つて呉れたのは仕合せであつた。今のままで別れて了つたら、二人の間の溝は遂に越えられない幅に広がつて了ふだらう。	
3	君はこのごろ健康を害しているやうにも見えます。（王）―「一」	彼が近頃何となく弱つて憂鬱になつたのは見てゐても気の毒である。	
4	わしは此の機会に、君と二人きりでゆつくり話してみたい。（王）―「一」 とにかく、わしはハムレットと二人きりで、ゆつくり話してみたいと思ひますから、みんなは暫く向かうへ行つていて下さい。（王）―「一」		
5	この喪服だつて、私たちへのいやがらせです。先王の死を、もはや忘れたのかといふ、当てこすりのつもりなのでせう。（王妃）―「一」	邪推かも知れないが、彼の母には彼の父の死後、余りに早く結婚した事を後悔してゐる風が見える。これが邪推でないとすれば、確にあの眼で毒注された考である。妻は彼の狂気が其処に原因してゐると信じてゐるらしい。	何しろ今は彼と語り合ふべき時ではない。その気分でない。今若し話し損へば、二人は永遠に取りかへしのつかぬ関係になりかねない。
6	王妃には、生みの母といふ安心があつて、その愛情を頼みすぎて、そんな事をいふのでせうが、陰の愛情よりも、あたはれた言葉のほ	自分には彼の母が彼を愛するやうには到底愛する事は出来ない。（略）二人の間では愛よりも今は理解である。そして理解し合へば其処にまた愛も湧くわ	

	うが重大なのです。わしにも、覚へがあります。言葉に拠つて、自分の全部が決定されてゐるやうな気がするものです。(王) ―「一」	7	ハムレツトが喪服を着ていたつて、少しも差しつかへ無いと思ひます。少年の感傷は純粋なものです。(王) ―「一」	8	ハムレツト、大きくなつたね。もう、わしと背丈が同じくらゐだ。これからも、どんどん大人になるでせう。(王) ―「一」	9
	けである。		寧ろ子供らしい男である。実際子供らしい低級な悪意の示し方であつた。		彼も妻が思つてゐるよりは遥かに大人である。	
						二人の間では愛よりも今は理解である。そして理解し合へば其処にまた愛も湧くわけである。

9	わしも思つているところを虚心坦懐に申しますから、君も、遠慮なさらず率直に、なんでも云つて下さい。どんなに愛し合つていても、口に出してる。云はなければ、その愛が互ひにわからないでいる事だつて、世の中には、ままあるのです。人類は言葉の動物、といふ哲学者の意見もわしには、わかるやうな気がします。けふは、よく二人で話し合つてみませう。(王) ―「一」	10	わしだつて君を、心の底から我が子と呼んで抱きしめる程の愛情は、打ち明けたところ、どうしても感ぜられない状態なのですから、君にだけ、無理に愛せよ等とは云へません。(王) ―「一」	11	はじめは身振りだけの愛の挨拶であつても、次第にそこから本当の愛が滲んで湧いて来る事だつてあると思ひます。(王) ―「一」	12
			自分には彼の母が彼を愛するやうには到底愛する事は出来ない。それの自分に望めないのは当然の事である。よしんば出来ても、彼もそれを其儘に受け入れられる人間ではもうない。		二人の間では愛よりも今は理解である。そして理解し合へば其処にまた愛も湧くわけである。	彼の自分の行為に対する見方は裏店に起つた或姦通事件を見るのと殆ど変わつてゐない。

があるのだ。いや、何もかもだ。みんな苦しい。

（ハム）―「一」

13

のぼせあがつてゐるんだから仕様が無い。（レヤ）―「二」

お父さんは、のんきだからまだ御存知ないやうだが、もしお父さんに知られた、どんな事になるか。お父さんは責任上、いまの重職を辞さなければならぬ。僕の前途も、まつくらやみだ。お前は、てて無し子を抱へて乞食にでもなるさ。

（レヤ）―「二」

確かにそれは彼が恋故に気が狂つた証拠だといふ。

尚、老人は自慢らしく娘が老人の意思通りに綺麗に彼を撥ねつけた事を口巧者にしやべり立ててゐたが、自分にはそれを其儘には承け入れ兼ねる事がある。

妾はあなたが恋しい、どうしても、恋しい、聞いて頂く事が一杯あるのです、

14

でも、あんなにやかましく、こまごま云つてやるのは、わしの、深く考へた上での計略なんだ。（略）なに、みんな出鱈目ですよ。どうだつていい事ばかりです。レヤチーズには、レヤチーズの生活流儀があるでせう。時代も、かわつているでせう。

（略）老いの繰言といふ奴だ。（ポロ）―「二」

あの老人は自身酸いも甘いもすつかり噛み分けて居るといふ自信（大した根拠もない）に捕はれてゐる男だ。だから、何も彼も早わかりの、早片づけをして一人で呑み込んでゐる。決して物の解つた人間ではない。

あなただつて、気違ひは気違ひです。早くクロオディヤス様をお殺しになるがいい、妾は知りません。

15

乱心？そりやあ、また滅茶だ。僕は艶聞か何かだと思つていた。

（略）どこから、そんな噂が出たのだらう。ははあ、わかつた。叔父さんの宣伝だな？　（ハム）―「三」

山羊の叔父さんは、あれでなかなかロマンチストだからな。（略）先王が死に、嗣子のハムレツトはその悲しみに耐へ得ず気鬱、発狂。この一家の不幸を背負ひ　敢然立つた新王こそはクローヂヤス。芝居にしたらいいところだ。叔父さんの宣伝さ。（ハム）―「三」

老人は自身見てでもゐたやうに芝居がかりの身振りで、それを話して、で、確かにそれは彼が恋故に気が狂つた証拠だといふ。

何となく低意のあるイヤな眼だ。自分はあの呪ふやうな眼で凝然と見られる時に心の自由を失ふやうな気がする。

（略）恋故に悶えてゐる者の眼では確にない。

16

叔父さんや、ポローニヤスたちは知知つてゐるのかしら。いつたい、あの人たちは、どこに耳を持つてゐるのだらう。聞へても、聞へぬ

老人は自分が老人の云ふ事を其儘に承け入れないもので、彼と娘とを人のゐない広間の廊下で偶然のやうに会はせて見ようと云ひ出した。立聞きは快い事で

ふりをしているのかな？腹黒いからなあ、あの人たちは。（ハム）—「三」

はないが、兎も角も承知して置いた。

17

あの人たちは、もうとしをとつているし、まあ茶飲友達でも作るやうな気持で結婚したんだらうが、僕には、やつぱり何だか、てれくさいな。でも僕は、そんな事は、あまり深く考へないやうにしているんだ。仕様がないじやないか。人の子として、あれこれ親の事を下劣に詮索するのは許すべからざる悪徳だ。（ハム）—「三」

彼が生れぬ前から彼の母を恋してゐた事まで打ち明けて差し支へない。彼の自分の行為に対する見方は裏店に起つた或姦通事件を見るのと殆ど変つてゐない。

18

だけど叔父さんは、悪い人ぢやない。それだけは、たしかだ。小さい策士かも知れないけれど、決して大きい悪党ぢやない。（ハム）—「三」

今になつて見れば自分は遂に其の弱点を彼から突き込まれたのであつた。

19

その幽霊の曰くです。我輩はクローヂヤスに殺された、クローヂヤスは、わが妃に恋慕し、（ホレ）—「三」

そいつあ、ひどい。恋慕はひどい。お母さんは総入歯だぜ。（ハム）—「三」

久しい恋—それには殆ど望みを断つてゐた恋を得た喜びには自分の心の均衡を失はずにはゐられない。

乃公が何時貴様の父を毒殺した？

貴様は乃公に覚えもない敵役を演じさようとそれを強ひて来る。さうだ、貴様のはそれを強いて来たのだ。それは許せない。

20

叔父さんも、可哀そうに。せつかく一生懸命努力しているところなのに、そんな噂を立てられてちや、台無しだ。ひど過ぎる。不愉快だ。（ハム）—「三」

21

此のデンマークの為とあつて、クローデイヤスどのと、名目ばかりですが、夫婦となつたといふ事も、あの子にとつては意外な事で、よつぽど気持を暗くさせたのではないかと思ひます。（王妃）—「四」

善良な妻の自分に対する態度は総て生前の兄へ対してのそれである。妻は彼の狂気が其処に原因してゐると信じてゐるらしい。

22

王妃は、すぐ怒るからいけません。（王）―「四」

此平和な女らしい性質を不満足に思ふのは自分が悪い。自分は妻のあの平和な性質を其儘に此家の中の調子にしたいと思ふ。

自分は彼女の善良な弱い性質をよく知つてゐる。

第一に彼の自分を見る眼が此二三日非常に不愉快になつた。何となく底意のあるイヤな眼だ。（略）恋に悶えてゐる者の眼では確にない。

23

ハムレツトのいらいらしているわけが、やつと、わかりました。（王）―「四」

困った事です。オフイリヤが、（王）―「四」

オフイリヤは、妊娠したといふのです。（王妃）―「四」

24

オフイリヤの事は、ポローニヤスが巧みに処理して呉れるでせうし、わしとしても出来るだけの事は、してあげるつもりでいます。（王）―「四」

今朝ポローニヤス老人が何かあわただしい用事ででもあるやうに、娘のオフイリアを彼が恋してゐるやうだと話して行つた。老人は又くどく自分が十二分の警戒をしてゐるから、それに就ては心配しないでくれと云つてゐた。正直にいへば彼が其恋を心から深く味つて呉れる事を自分は望むのである。さうすれば彼の母に対する自分の恋にも其処から多少の理解が湧いて来ねばならぬ筈である。

25

寄ってたかって、僕を本物の気違ひにしやうとしている。（ハム）―「五」

ああ、皆が寄ってたかって乃公を気違ひにしようと云うのだ。

26

結婚します。あたり前です。どんな障害があっても結婚しなければいけません。僕は、オフイリヤを愛しています。（ハム）―「五」

どうだか、あぶないものです。

ハムレツトさま、あなたは、お若い。（ポロ）―「五」

彼があの娘を恋してゐる事は自分も感じてゐた。

老人は彼の恋を割の浮いたもののやうに解つてゐる。それは可哀想だ。

27

娘の幸福のためには、王をさへ裏切らうとする人間です。（ポロ）―「五」

いまは、たのみとすべきは、ハムレツトさま、あなただけです。

老人は自分が老人の云ふ事を其儘に承け入れないもので、彼と娘とを人のゐない広間の廊下で偶然のやうに会はせて見ようと云ひ出した。

（ポロ）―「五」

28

実は、このごろの城中の、もう一つの暗い噂、あれを、ポローニヤスは信じています。（ポロ）―「五」

乃公が何時貴様の父を毒殺した？誰がそれを見た？見た者は誰だ？一人でもさういふ人間があるか？一体貴様の頭は何からそんな考を得た？貴様はそれを聞いたのか？知ったのか？想像したのか？

妾は知づてをりました。王様の亡霊の事だつて、ホレエショ様をだまして聞きました。

29

この辺いつぱいに様々の草花も咲き乱れます。金鳳花、いらくさ、雛菊、それから紫蘭、あの紫蘭の事を、しもじもの者たちは、なんと呼んでゐるか、オフイリヤは、ご存じかな？（王妃）―「六」

眼のすぐ前に、はつきりと手だけが見えて、その手が白い雛菊といらくさの束を握つてゐますあそこに毛莨が一杯咲いてゐます。

雛菊に、いらくさに、毛莨に、要らない花は、パン屋の娘にやりました。

雛菊に、いらくさに毛莨に、パンなんか要らないんです、

30

女には、かならず女の、くだらなさがあるものでせう。どう仕様も無いものですね。こんな歳になつてもまだ、デンマークの国よりは雛菊の花一輪のほうを、本当は、こつそり愛しているのですもの。女は、だめですね。（王妃）―「六」

先王にも、現王にも、またハムレツトにも、みんなにだまされていたのです。デンマークのため、といふ言葉は、なんだか大きい崇高な意味を持つているやうで私はいつでも、デンマークのためとばかり思つて、苦しい事でも悲しい事でも怺へて来ました。神さまからいただいた尊いお仕事をしてゐるのだといふ誇りがあつたものですから、ずいぶん淋しい時でも我慢が出来たのです。（王妃）―「八」

女も浅墓はものですが、男のひとも、あんまり利巧とは云えませんね。あたた達には、まだ、

善良な妻の自分に対する態度は総て生生前の兄へ対してのそれである。

自分は妻のあの平和な性質を其儘に此家の中の調子にしたいと思ふ。

自分は彼女の善良な弱い性質をよく知つてゐる。

自分は妻程に女らしい優しい美しい心を持つた女を知らない。

わかつていないでせうが、男のひとは、それは気の毒なくらゐ、私たちの事を考へてゐるものなのですよ。（王妃）――「六」

31

あの子は、あなたの事で半狂乱の様子ですし、他の人だつて、自分の地位や面目の事ばかり心配して、あちこち走り廻つてゐるやうな具合ですから、ちづとも頼りになりません。（王妃）――「六」

妻はポローニヤスの娘に、「あの子の心が狂つたのがお前のきりやう故であれと念じて居ます。それなら又お前の気立であれを正気にさす事も出来ませうから：：」

：：ああ、あなたは何んと遠い処で暮していらつしやる。

あなただつて、気違ひは気違ひです。早くクロオディヤス様をお殺しになるがいい、妾は知りません。何んにも知りません。

：：どうせ、妾は子供なんです。何にも知らない子供です、そんなに幾度もおつしやらなくともいい。妾は、あなたの様に悧巧になる暇がなかつた、なんにも覚える暇はなかつた。その代り、色々な事を無理矢理に覚えさせられました。おつしやる様に無邪気なのかもわからない、だけど、あなたにはわからない。無邪気が、どんなに悲しいものだか御存知なければ、無邪気だ、とおつしやつたつて詮ない事だ。

32

からだの具合も、さいわい今朝から、こんなにすつきりして来したし、もうこれからは、いじけずに、昔のとほりにお転婆なオフイリヤになるのです。（オフ）――「六」

あの女らしい、賢い娘には自分も同情を持つてゐる。

何も彼も空しい、さう、さう、あなたのお好きなお話しです妾は飽き飽きする程、聞かされました。：：空しいと、どうなんでせう、何にもどうにもつてはくれない。言つてみたいだけなんです。あなたもそんな事を言つてみたいお方なのです。いいえ、妾だけは別です、別でちつともかまひません。

あなたの、さういふお話しをいつも上の空で聞いてゐると言つては、妾の事をお責めになつた。妾は、ちやんと聞いてをりました。ただ、妾の顔

33

お性格だつて、決して御立派ではございません。めめしいとでも申しませうか、ひとの陰口ばかりを気にして、いつもいらいらなさつて居ります。いつかの夜など、信じられるのはお前だけだ、僕は人にだまされ利用されてばかりいる、僕は可哀想な子なのだからお前だけでも僕を捨てないでおくれ、と聞いていて浅間しくなるほど気弱い事をおつしやつて、両手で顔を覆ひ、泣く真似をなさいました。どうして、あんな、気障なお芝居をなさるのでせう。さうしてちよつとでもあたしが慰めの言葉を

其時彼は娘にこんな事を云つてゐた自分は元来は正直だが、高慢で、執念深くて、それに野心が激しくて、若し自分で許せさへすれば、かなりの悪事も仕かねない。が、只それを調整へる思案と、それに像を附ける想像力とがなく、又時も場合もないから仕方ないのだ。

躊躇している時には、たちまち声を荒くして、ああ僕は不幸だ、誰も僕のくるしみをわかつてくれない、僕は世界中で一ばん不幸だ、孤独だ等とおつしやつて、髪の毛をむしり、せつなさうに呻くのでございます。ご自分を、無理矢理悲劇の主人公になさらなければ、気がすまない御様子でありました。突然立ち上つて、壁にはつしとコーヒー茶碗をぶつけて、みじんにしてしまふ事もございます。さうかと思ふと、たいへんな御機嫌で、世の中に僕以上に脳の鋭敏な男は無いのだ、僕が稲妻のやうな男だ、僕には、なんでもわかつているのだ、悪魔だつて僕を欺く事は出来ない、僕がその気にさへなれば、どんな事だつて出来る、どんな恐ろしい冒険にでも僕は必ず成功する、僕は天才だ等とおつしやつて、あたしが微笑んで首肯くと、いやお前は僕を馬鹿にしている、お前は僕を法螺吹きだと思つてゐるのに違ひない、お前は僕を信じないからだめだ、お前なんかにはわからない、と急に不機嫌におなりになつて、あたしがどんなに誓言しても、こんどは、ひどく調子づいて御自身の事を滅茶苦茶に悪くおつしやいます。（略）けれども、あたしは、あのお方を好きです。あんなお方は、世界中に居りません。どこやら、とても、すぐれたところがあるやうに、あたしには思はれます。いろいろな可笑しな点があるにしても、どこやらに、神の御子のやうな匂ひが致します。（オフ）―「六」

あたしは感じた事を、いつわらず、そのまんま申し上げた筈でござ

が上の空だつたのでせう。それとも、何一つ空しいものはない様な顔をしてゐましたかきつと、それがお気に触つたんでせう

あなたは、何んでも妾の知らない事でお腹をお立てになる。知らない振りをしてる、とおつしやる。

妾は、あなたのお顔を見てゐる時ほど、忙しい思ひをした事はありません。あなたの胸の四角な鎖を数へながら、何んといふ思ひをした事だらう。妾の頭はわけの解らない、支へ切れない思案で、いつも一杯になつてゐた。妾は仕方なく、ほんとに仕方がないので笑つてゐた。

：夜が明けたら、いや、いやそんなに急ぐ事はない、妾はか

います。あたしの申し上げた事は、皆ほんとうなのです。あれこれと食ひちがふのは、きつと、あたしの言ひかたが下手なせいでせう。あたしは王妃さまにだけは嘘をつくまひと思つてゐますし、また、嘘をついても、それにだまされつやうな王妃さまでもございませんから、あたしは感じた事、思つてゐる事を、のこらず全部申し上げやうと、あせるのですが、申し上げたいと思ふ心ばかりが、さきに走つていつて、言葉が愚図愚図して、のろくさくて、なかなか、心の中のものを、そつくり言ひ現わす事が出来ません。あたしは、神さまに誓つて申し上げますが、あたしは正直でございます。あたしは、愛しているおかたにだけは正直にならうと思ひます。あたしは王妃さまを好きなので、一言も嘘を申し上げまいと努めているのでございますが、努力する程あたしの言葉が、下手になります。（オフ）―「六」

うして書いてゐる方へ行けばいい、書いてゐる方へはこんで行かれればそれでいい、でも何を書いたらいいのだらう。……言葉はみんな、妾をよけて、紙の上にとまつて行きます。……一体、何んだらう、こんなものが、……こんな妙な蟲みたいなものが、どうして妾の味方だと思へるものか。妾は、もつと確かな顔をしたものにも、幾度も、裏切られて来た、例へば、……飽き飽きしました。ねえ、だから何か外の事を書きませう。だから、書いたつて書いたつて、ほんとにどうしたらいいのだらう……ああ、妾は疲れた。……ああ、言葉は何にもおしまひにしてくれない。だから、みんな出鱈目です。前の方はお読みになつてはいけない、だから堪忍して下さい

それなら、今頃は船の上で、妾の事など少し位は考へていらつしやるか。妾の事なぞお考へにならなくてもいいのに。妾はあなたの事なんかちつとも考へてはをりません、朝から自分の身の上の事ばかり思つてをりました。

妾はあなたが恋しい、どうしても、恋しい、

35

どうやら僕はオフイリヤに、まいつてしまつてゐるらしい。だらしの無い話だ。ドンフアンを気取つて修行の旅に出かけて、まず手はじめにと、ひとりの小娘を、やつとの事で口説き落したが、その娘さんと別れたといふ笑ひ話。（ハム）―「七」

彼があの娘を恋してゐる事は自分も感じていた。

36

イギリスの女流詩人のなんだか、ひどく甘つたるい大時代の作品を、ポローニヤスが見つけて来て、これを台本にして三人で朗読劇をやらうと言ひ出す始末なのだから恐れいる。しかも

老人に、昔大学で芝居をした時、何の役を演たかと貴様が訊いた。老人はシーザーになつて殺されましたと答へた。其時貴様は何故乃公の顔を盗み見た？貴様は其時どれだけ正当に乃公の顔から乃公の心を読み取る事が出来たと信

ポローニヤスの役は、花嫁といふのだから滅茶だ。なるほどその詩の内容は、いまの叔父上と母にとつては、ちよつと手痛ひかも知れない。（ハム）―「七」それも、つまらぬ小細工ばかり弄して、男らしい乾坤一擲の第陰謀などは、まるで出来ない。ポローニヤス！少しは恥ずかしく思ひなさい。あんな、嘴の青ひ、ハムレツトだのホレーショーだのと一緒になつて、歯の浮くやうな、きざな文句を読みあげて、いつたい君はどうしたのです。なにが朗読劇だ。（王）―「八」とにかくあの芝居は、いや、朗読劇か、とにかくあのくだらない朗読劇は、君の発案ではじめたものに違ひない。わしには、ちやんとわかつています。ハムレツトだつて、ホレーショーだつて、もつと気のきいた台本を択びます。あんな大仰な、身震ひせざるを得ないくらゐの古くさひ台本は、君でなくては、択べません。何もかも、君の仕業です。（王）―「八」

ホレーショーは、最初はあんなに気がすすまないやうな事を云つていながら、稽古がはじまると急に活気づいて来て、ウイツタンバーグの劇研究会仕込みとかいふ奇妙な台詞まはしで黄色ひ声を張りあげていた。あいつは本当に正直な男だ。自分の感情を、ちつとも加工しないで言動にあらはす。どんな、へまを演じても何だか綺麗だ。いやらしいところが無い。しんから謙虚な、あきらめを知つてゐる男だ。それに較べてこの僕は、ああ、馬鹿だ。（ハム）―「七」

ホレーショーどのは、もう、此のじてゐる？が、あの芝居はなんだ―「ゴンザゴ殺し」！言葉の陳腐をさへ嫌ふと自ら云ふ人間で、あの露骨な仕組は何だ？しかも、それで、臆面もなく他にのしかかつて来る。

然しいやに落着いたホレーショの眼が絶えず乃公の顔を見つめてゐる。仕舞には乃公自身の神経までが乃公の顔の筋肉の微細な運動を凝視しだした。

王様の亡霊の事だつて、ホレエショ様をだまして聞きました。

朗読劇の底の魂胆を忘れてしまつたかのやうに、ただただ、芝居をするといふ事の嬉しさに浮かれ、あんなに熱心に稽古をしていたぢやありませんか。あれでいいのです。（ポロ）―［七］

イギリスの或る女流作家の傑作、『迎へ火』といふ劇詩を演出して御覧にいれまする。（ポロ）―［七］

人間が可哀想だ。僕も、ホレーショーも可哀想。ポローニヤスも、オフイリヤも、叔父さんもお母さんもみんな、みんな可哀想だ。僕には、昔から、軽蔑感も憎悪も、怒りも嫉妬も何も無かつた。（略）ホレーショーも、叔父さんも母も、ポローニヤスも、みんな可哀想だ。僕のいのちが役に立つなら、誰にでも差し上げます。このごろ僕には人間がいよいよ可哀想に思はれて仕様がないんだ。（ハム）―［七］

乃公に対する貴様の底意、それを乃公は前から気づいてゐた。が、これまではどうかしてそれに好意を持たうと考へてゐた。自身にも起つて可来る貴様に対する悪意は、それは出来るだけの努力で殺してきたのだ。乃公は貴様の母に対しても、さうして来たのだ。（略）乃公はもうはら底から貴様を憎む！腹の底から憎む事が出来る！

ああ、あたし達は一体、何をして来たのです。知り過ぎて、何も彼も知り過ぎて、あたし達はみんな滅茶苦茶にしてしまつたのが。いえ、いえ、恋しい人の事を誰がぼんやりしてゐられよう。色んな事があつたぢやありませんか、色んな事が、ねえ、思ひ出して下さいな、色んな事が、：：ああ、お父様：：

叔父さんは、僕以上に弱ひ人なんだ。一生懸命に努ているのだ。ああ、僕は馬鹿だ。叔父さんを冗談にも一時、疑つていたなんて、僕はおつちよこちよいの、恥知らずだ。（ハム）―［七］

ああ恐ろしい底意だ、憎むべき底意だ。貴様のそれが、乃公の感情の行く所、何処へでも待伏せをしてゐる。乃公の心はそれを見つめながら進んで了ふ。そしてそれへ陥つて了ふのだ。

早くクロオデイヤス様をお殺しになるがいい、妾は知りません

これは一体、誰の猿智慧なんです？ばかばかしくて、見て居られません。どうせ、いやがらせをなさる積りなら、も少し気のきいた事をやつて下さい。あなたがたは卑怯です。陋劣です。私は、おさきに失礼します。（王妃）―［七］

ちつとも怒る事は、ありません。面白いぢやないか。まだ、此のつづきもあるやうです。（王）―［七］

乃公はもうあの場にゐたたまらなくつたのだ。が、場をはずす事の危険を考へると起つた事も出来なくなつたのだ。「無心に、無心に」乃公はこれをどの位、心に繰返したか知れない。

41

さつき王妃から聞ひた事ですが、このごろあちこちにハムレツトのお弟子があらはれているさうですね。ホレーショーじは、あれは前からハムレツトに夢中で口の曲げかたまでハムレツトの真似をしているのですが、このごろはまた、わかひ女のお弟子も出来たさうです。それからまた、ただいまは、おじいさんのお弟子も出来たやうです。ハムレツトも、こんなにどしどし立派な後継者が出来て、心丈夫の事でせう。(王) ―「八」

口巧者で、そして賢さうな眼差しをしてゐる彼は或一部分の人間から尊敬されてゐるから此国では罰する事は出来ない。

42

ハムレツトさまは、やはりイギリスから姫をお迎へなさらなければなりません。一国の安危にかかはる事です。(ポロ) ―「八」

イギリスから姫を迎へる事は、重大な政策の一つではあつたが、わが家を不和にして迄、それを敢行する勇気は、わしには無いのだ。わしは、弱い！(王) ―「八」

今は矢張り英吉利へやらうと考へてゐる。

今頃は何処で何をしていらつししやるか。なんでもイギリスの方へお立ちになつたと聞きました。

43

先王の死因に就ひて、けしからぬ憶測が囁き交されてゐるといふ事は、わしも承知して居ります。怒るよりも、わしは、自分の不徳を恥ずかしく思ひました。(略)

わしは、たまらなく淋しく思つています。けれども、噂は、ひろがるばかりで、このごろは外国の人の耳にもはいつている様子でありますから、このまま、わしが自らを責めて不徳を嘆ひているだけではいよいよ噂も勢ひを得て、とりかへしのつかぬ事態に立ちいたるかも知れぬと思ひ、この噂の取締りに就ひて、君と相談してみたひと考へていたところでした。(王) ―「八」

毒殺、これ程のことがどうして隠しきれるものか。人眼の多い中で、どうして隠しきれるものか。そして若し誰か知つてゐるものがあれば、仮令どれ程の権力で押さへつけようが、口から耳へ、又口から耳へと順々に伝ばらずにゐるものか。貴様は一人でも偽りなくそんな陰口をきき得る者を実際に知つてゐるか？誰がある？貴様は一つでも客観的に認め得る証拠を手に入れる事が出来たか？

44

自惚れもたいがいになさいまし。

まして久しい恋―

恋ゆへ人は、盲目になるゆです。王さまこそ、どうかなさつて居りますご自分が恋していらつしやると、人も皆、恋しているもののやうに見へるらしい。とにかく、その、嫉妬とやらいふお言葉だけは、お返し申し上げます。ポローニヤスは、男やもめの生活こそ永く致してまひりましたが、不面目の色沙汰ばかりは致しませぬ。（ポロ）―「八」

ひとりで、ひがんで、君たち一家が、もう没落するものとばかり思ひ込み、自暴自棄になつてしまつて、王妃には、かなはぬ恋の意趣返し、つまらぬ朗読劇などで、あてこすりを云ひ、また、此のわしには、はじめは忠臣の苦肉の策だ等と云ひくるめやうとして、見破られると今度は居直つて、無礼千万の恐喝めいた悪口雑言をわめき立てる。ポローニヤス、わしは、もう君たちを許すのが、いやになつた。（王）―「八」

45

王妃は、もはや、オフイリヤの味方になつてゐます。王妃は、けふの夕刻このわしに、泣いて跪ひてたのみました。けう迄わしを冷笑して来たガーツルードが、初めて誇りを捨ててたのみました。（王）―「八」

46

あの事を、わしは知らないと思つているのですか。わしは、見たのです。此の眼でちやんと見たのです二箇月前、あれを、一目見たばかりに、それ以来わしは不幸つづきなのだ。王さまは、わしに見られた事に気附いて、それからわしを失脚させやうと鵜の目、鷹の目になられたのです。わしは、王さまから嫌はれてしまつた。（ポロ）―「八」

善良な妻の自分に対する態度は総て生前の兄へ対してのそれである。

今、ポローニヤスが殺された！剣で突き殺したと云ふ。気違ひだ！気の違つた悪魔だ！

妻は「気違ひながら、殺した事を甚く後悔してゐます」と云つてゐるが、自分はもうそれは信じない。

妾は平気です、何だつて平気です。お父様の事だつて平気ですそら、妾がお父様の髪の血を洗つてゐたでせう。だつて固まつてゐるんだから、なかなかとれやしません。

殺すつもりは無かつたがつひ、鞘が走つて、突き刺した。さきほどからの不埒の雑言、これも自分の娘可愛さのあまりに逆上したのだ、不憫の老人と思ひ怺へて聞ひていたのだが、いよいよ図に乗り、つひには全く気が狂つたか、奇怪な恐ろしい事までわめき散らすので、前後のわきまへも無く短剣引き抜き、突き刺した。（王）―「八」

あつ！誰だ！そこに立つてゐるのは誰だ！逃げるな。待て！おお、ガーツルード。（王）―「八」

47

ボローニヤスが、昨夜から姿を見せぬか。それは少し、へんだね。でも。まあ、たいした事は無かろう。大人には、おとなの世界があるんだ。（ハム）―「九」

父がゆうべから姿を見せぬので、少し心配でございますが、でも、あたしは、父を信じて居ります。父は、ハムレットさまのおつしやるやうな、そんな悪い人ではございません。（オフ）―「九」

彼は老人の死体を何処かへ隠して了つた。何にせよ自分はもう彼を自分の傍へ置く事は出来ない。

妾は気が違つてゐたのです。ふと、死んだ方がいい、死なう、とはつきり思ひました。今にも壊れさうなこんな心を後生大事にだき乍ら、妾はあの世に行きたい、あの世、あのあの世とは何んだらう、あの世だつて、おんなじ景色をしてゐるのぢやないかしら。おつしやる様に無邪気なのかもわからない、だけど、あなたにはわからない。無邪気が、どんなに悲しいものだかご存知なければ、無邪気だ、とおつしやつたつて栓ない事だ。いいえ、ほんとに気が狂つてゐたんです、嘘はつきません、

48

きのうから、別のひとのやうに、すつきりしてまゐりましたし、もういまでは、ハムレットさまのお子さまを産んで、丈夫に育てるといふ希望だけで胸がいつぱいでございます。あたしは、いまは幸福です。とても、なんだか、うれしいの。これからは、昔のお転婆なオフイリヤにかへつて、誇りを高くもつて、考へている事をなんでも云はうと思ふの。（オフ）―「九」

あの女らしい、賢い娘には自分も同情を持つてゐる。

優しい娘は気が違つた。一人の心に不図湧いた或「考」がこれ程に多くの人間を不幸にしようとは考へなかつた。もう自分は心から彼を呪ふ。

49

このごろ、なんだか、いやな噂がお城にひろがつているやうですけど、誰も本気に噂してゐるわけぢやなかつたのよ。あたしのところの乳母や女中は、そんな芝居が外国で流行つてゐるさうですね。面白く仕組まれた芝居ですね、なんてのんびり云つて居ります。まさか、此のデンマークの王さまと王妃さまの事だ等とは、ゆめにも思つていない様子でございます。みんな、のどかに王さまと王妃さまをお慕ひ申して居ります。それでいいのだと思ふわ。本気に疑つてくるしんでいなさるのは此のエルシノア王城で、ハムレツトさま、あなただけなのものなのよ。（オフ）—「九」

人眼の多い中で、どうして隠しきれるものか。そして若し誰か知つてゐるものがあれば、仮令どれ程の権力で押さへつけようが、口から耳へ、又口か耳へと順々に伝はらずにゐるものか。貴様は、一人でも偽りなくそんな陰口をきき得る者を実際に知つてゐるのか？老人の死体を秘かに埋めたのが愚民共に妙な邪推を抱かせた。フランスから帰つて来たといふレアーチーズまでが其噂に乗つて自分を疑つてゐる様子だ。

ほんたうです、前にもそんな事があつたんです。

王様の亡霊の事だつて、ホレエショ様をだまして聞きました。

50

僕には、そんな資格が無い。僕は、うらめしいのだいつも、あの人たちを信頼し、心の隅では尊敬さへしているのだ、あの人たちは、へんに僕を警戒し、薄汚ひものにでも触るやうな、おつかなびつくりの苦笑の　態度で僕に接して、ああ、あの人たちは、そんなに上品な人たちばかりなのかねえ、いつでも見事に僕を裏切る。打ち明けて僕に相談して呉れた事が一度も無い。大声あげて、僕をどやしつけてくれた事もかつて無い。どうして僕を、そんなにみやがるのだらう。僕はいつでもあの人たちを愛している。愛して、愛して、愛しもている。いつでも命をあげるのだ。（ハム）—「九」

乃公に対する貴様の底意、それを乃公は前から気づいてゐた。彼はたうとう彼の母まで後悔させて了つた。—母を責めてゐる時、彼は父の幻を見るやうな様子をしたと云ふ事だ。人違ひから刺し殺したポローニヤスの子供等に対しても何とも考へてゐない。

あなただつて気違ひです。早くクロオデイヤス様をお殺しになるがいい。妾は知りません。

小理屈を覚へた女は、必ず男に捨てられますよ。パウロが云つていますよ。われ、女の、教うる事と、男の上に権を執る事を許さず、ただ静かにすべし、とね。さうして、女もし慎みと信仰と愛と潔きとに居らば、子を生む事に因りて救はるべし、と云ひ結んである。人にものを教へやうと思ゆたり、男の頭を押さへやうとしないで、ただ、静かに、生れる子供の事を考へていなさい、といふ意味だ。いい子だから、二度と再び、変は理屈は云はないでくれ。世界が暗くなつてしまう。察するところ、お母さんから悪智慧を附けられて、妙に自信を得たのだらう。こんど君が、お母さんに逢つたら、かう云つてくれ。言葉の無い愛情なんて、昔から一つも実例が無かつた。本当に愛してゐるのだから黙つているといふのは、たいへんな頑固な　ひとりよがりだ。（略）愛は言葉だ。言葉が無くちや、同時にこの世の中に、愛情も無くなるんだ。愛が言葉以外に、実体として何かあると思つていたら、大間違ひだ。聖書にも書いてあるよ。言葉は、神と共に在り、言葉は神なりき、之に生命あり、この生命は人の光なりき、と書いてあるからお母さんに読ませてあげるんだね。（ハム）—

「九」

もし愛情が、言葉以外に無いものだとしたなら、あたしは、愛情なんかつまらないものだと思ひます。（略）あ　たしには、どうしても、ハムレツトさまのおつしやる事は、信じられません。神さまが、居ります。神さまは、黙つていて、さうして皆を愛し

そんな事はどうでもよい、二人の間では愛よりも今は理解である。そして理解し合へば其処にまた愛も沸くわけである。

又娘に切りに寺へ行け、寺へ行けと云つてゐた。

：：：：おや、おや、点々ばかり書いてゐて、どうする気でせう。女の手紙には、必度、点々があるものだ、とあなたはおつしやる。ありますとも、点々だつて字は字です。

さうだ、ほんとに、さう言つてやればよかつた、尼寺へ行けだなんて、あなたこそ死んでしまへばいいのです。

：いくら言つても同じ事です。何の手応へはない、水の様に、風の様に、妾はかうして書いてゐる方へ行けばいい、書いてゐる方へ行かれればそれでいい、でも何を書いたらいいのだらう

：：言葉はみんな、妾をよけて紙の上にとまつて行きます。

：：ああ、言葉は何にもおしまひにはしてくれない。

思ふまい、怖がる事はない眼をあけたまま眠る人もあると言ひます、妾も眼をあけたまま眠れればいいのです。

して居ります。神さまは、お前を好きだ！なんて、決して叫びいたしません。けれども、神さまは愛して居ります。みんなを、森を、草も花も、河も、娘も、おとなも、悪い人も、みんなを一様に、黙つて愛して下さいます。

（オフ）――「九」

おさない事を云つている。君の信仰しているものは、それは邪教の偶像だ。神さまは、ちやんと言葉を持つて居られる。考へてごらん。一ばんはじめ僕たちに、神さまの存在を、はつきり教へてくれたものは、なんだらう。言葉ぢやないか。福音ぢやないか。キリストは、だから――おや、叔父さんが、大勢の侍者を引きつれて、血相かへてやつて来た。（ハム）――「九」

レヤチーズは、悲壮にも船と運命を共にしたのです。惜しい男だ。父に似ぬ、まことの忠臣、いや、父の名を恥かしめぬ天晴れの勇者です。わしたちは、レヤチーズの赤心に報ひなければならぬ。いまは、デンマークも立つべき時です。（略）レヤチーズは、尊ひ犠牲になつてくれました。父子そろつて、いや、レヤチーズの霊は必ず手厚く祭つてやらう。それが国王としてのわしの義務だ。（王）――「九」

レヤチーズ。僕と同じ、二十三歳。竹馬の友。少し頑固で怒りつぽく、僕には少し苦手だつたが、でも、いい奴だつた。死んだのか？オフイリヤが聞ひたら卒倒するだらう。ここにいなくてさいわいだつた。レヤチーズ。その身に箔をつけるため、将来のおのれの出世に備へるため、フランスに

フランスから帰つて来たといふレアーチーズまでが其噂に乗つて自分を疑つてゐる様子だ。

優しい娘は気が違つた。

あの時の事を思ふと泣きたくなります。ほんのちよつとした食ひ違ひなのです。死ぬ程怯へてゐたのに、そのぢつとしてゐた手が不意に動いてしまつたのです。

妾は平気です、何んだつて平気です、お父様の事だつて平気です。

このまま、ぢつと閉じ込められてゐればいい、壁がどんなに厚くつても。

こんなに忙しいのに、何もパンの事なんか、まるで狂気の沙汰です、いいえ、ほんとに気が狂つてゐたんです、

遊学の途端に、降つて湧ひた災難、その時とつさに自分の野望をからりと捨てて、デンマーク国の名誉を守るために、一身を犠牲にして悔ひる色が無かつた。僕は、負けたよ。（ハム）—「九」

53

わしは、はつきり云ひますが、ポローニヤスは、いまこの城にいないのです。あれは不忠の臣です。（王）—「九」

彼は老人の死体を何処かへ隠して了つた。

老人の死体を秘かに埋めたのが愚民に妙な邪推を抱かせた。

54

ハムレツト、あの城中の噂は、事実です。いや、わしが、先王を毒殺したといふのは、あやまり。わしには、ただ、それを決意した一夜があつた、それだけだ。先王は、急に病気でなくなられた。ハムレツト、君は、それでもわしを、罰する気ですか？恋のためだ。くやしいが、まさに、それだ。ハムレツト、さあ、わしは全部を云ひました、君は、わしを、罰するつもりですか？（王）—「九」

神さまに、おたづねしたらいいでせう。ああ、お父さん！いいえ、叔父さん、あなたぢやない。僕には、僕のお父さんが、あつたのだ。可哀想なお父さん。きたいない裏切り者の中でにこにこ笑つて生きてゐたお父さん。裏切り者は、この、とほり！（ハム）—「九」

ハムレツト、気が狂つたか。短剣引き抜き、振り翳すと見るより早く、自分自身の左の頬を切り裂いた。馬鹿なやつだ。（略）オフイリヤの事なら、心配せんでもよいのに、馬鹿な奴だ。君が凱旋した時には、必ず添はしてあげるつもりだ。泣く事はない。戦争がはじまれば、君も一方の

自分は嘗て一度でも兄を殺さうと思つた事はない。（略）兄は三年程前から自分と彼女との間を疑ひ出した。秋の月のある寒い晩だつた。納屋につながれてゐる番犬がよく鳴いた。狩場の慣れない堅い寝床では自分は中々寝つかれなかつた。暗いランプが兄と自分との並べた枕元に弱い陰気な光を投げてゐた。（略）それは兄の夢の中でその咽を絞めてゐるものは自分に相違ない、かういふ想像であつた。すると暗い中にまざまざと自分の恐ろしい形相が浮んで来た。自分には同時にその心持まで想ひ浮かんだ。—残忍な様子だ。彼も、もう英吉利へ着く頃である。

なんでもイギリスの方へお立ちになつたと聞きました。ああ、妾には、たつた一つの事しか要らないのに、何んとあなたは沢山の夢を持つていらつしやる。復讐だとか、戦争だとか、あんな色々な脚本だとか、それで、妾の様なものの、眼の色さへ読む事がお出来にならない。

指揮者なのです。（王）―「九」

55

ああ、王妃さまが、あの、庭園の小川に、―（ホレ）―「九」

56

わしが悪いのではない！あの人が、弱かつたのだ。他人の思惑に負けたのだ。（王）―「九」

あの廻りくどい云ひ廻しと浅薄な皮肉とは科白の抑揚変化の為だ。それに過ぎない。そして自身その主人公といふいい役を引きうけて置いて、いやな敵役を自分に振らうと云ふのだ。どんな役者がやつても悲劇の主人公は直ぐ女を泣かす事の出来るものだ。無邪気で、そして単純な彼の母は其処につけ込まれたのだ。

自分には近頃何となく弱々しい心が起る。然し自分を殺さうとする者を憐む心はいいとは考へられない。

彼の死の知らせが来た時を想ふと、彼の死の知らせが来た時を想ふと、妻を考へても、自分を考へても堪へられない気持になる。いやな事を凝づと待づ心持程に不愉快なものはない。「時」が自然にそれを近づけてくれる。弱い心を押へて只凝つと眼をねむつてゐなければならない・・・。

57

汚辱の中にいながらも、堪へ忍んで生きてゐる男もいるのだ。わしは、死なぬ。生きて、わしの宿命を全ふするのだ。神は、必ずや、わしのやうな孤独の男を愛してくれる。強くなれ！クローヂヤス。恋を忘れよ。虚栄を忘れよ。デンマーク国の名誉、といふ最高の旗ぢるし一つのために戦へ！（王）―「九」

自分が兄の死を心から悲しめなかつたといふのはそれは寧ろ自然な事ではないか。自然だといふのが立派なジャスティフィケーションである。自分だけなら立派なジャスティフィケーションになつてゐるのだ。然るにそれを彼が破壊してかかつた。それだけなら未だよかつた。悲しい事には、その「彼」自分の内にも住んでゐたのだ。

其意味では自分にとつて自分の心程に不自由なものはないのである。実際今の自分には、自分を殺さうと考へてゐる彼よりも、どうにもならない自身の自由な心の方が恐ろしい。

58

ハムレツト、腹の中では、君以上に泣いてる男がいますよ。（王）―「九」

明日はもうこの世にはゐない身です。

（了）